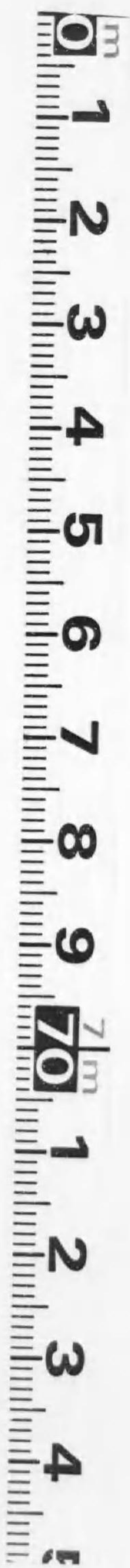


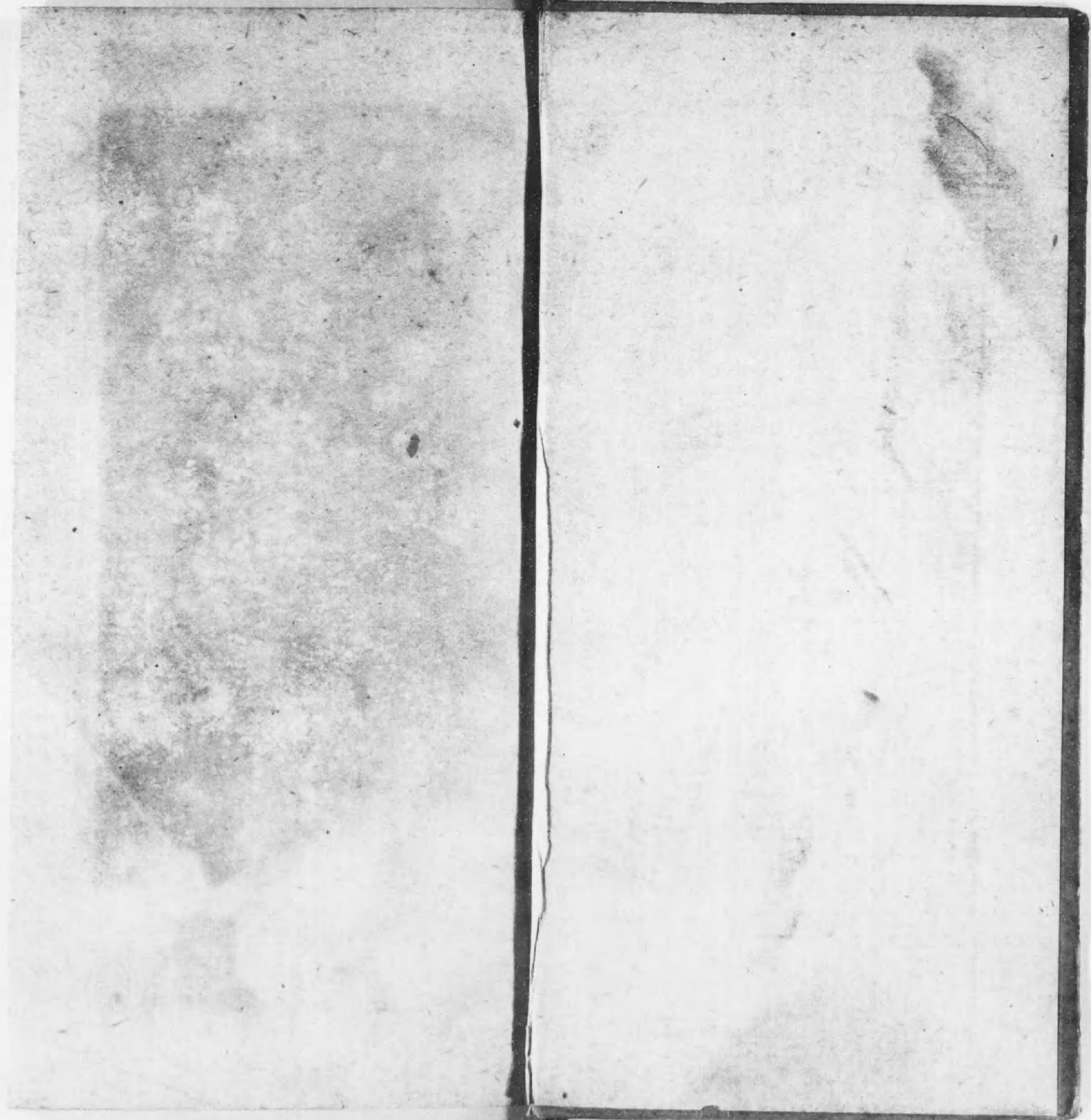
石角春洋著  
人をチャ  
ムする  
應接の仕方



始

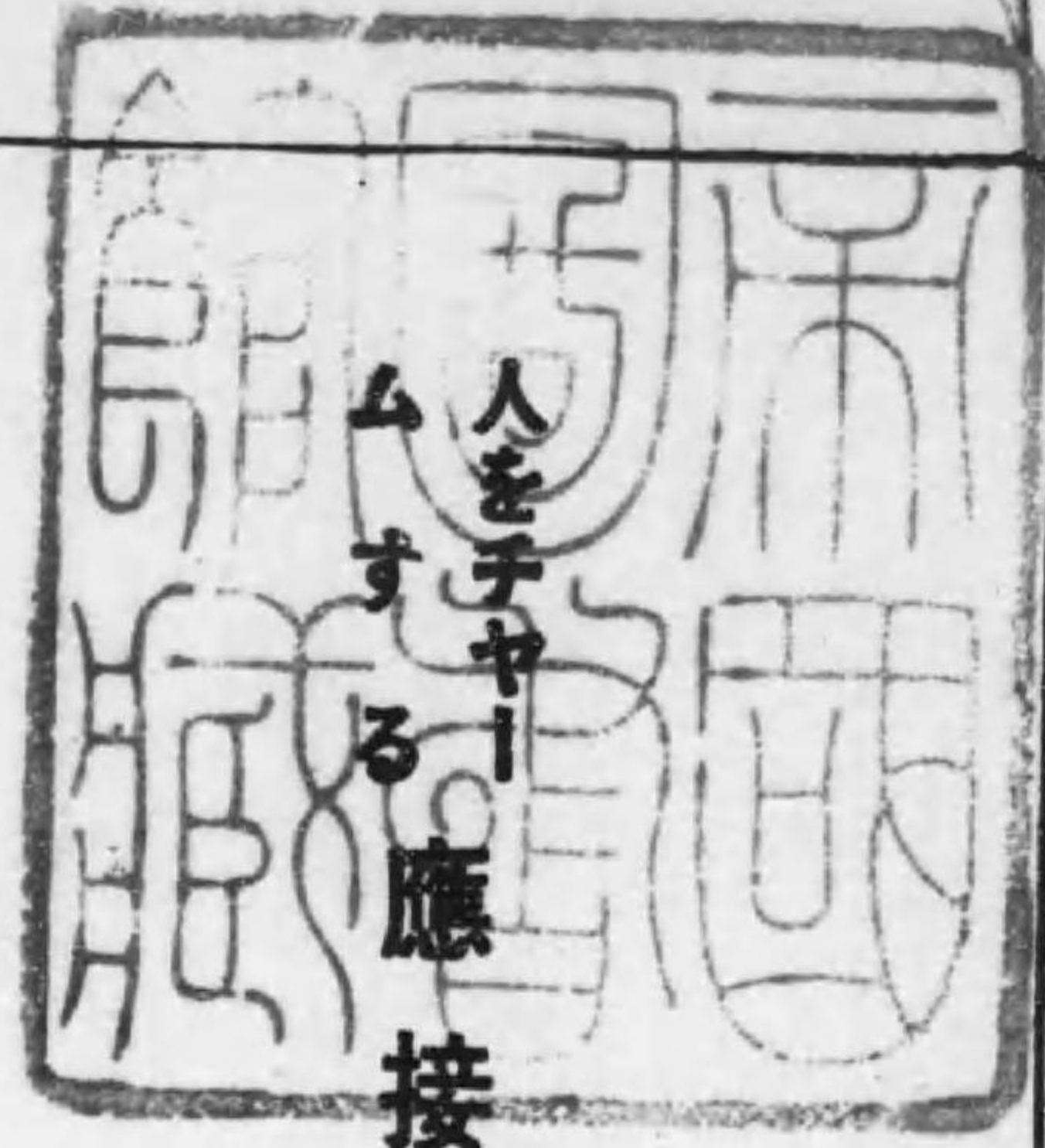








特109  
664



人をチャイムする  
應接の仕方



石角春洋著

大正  
10 4.23  
内交



はしがき

近頃は色々な主義が流行して来た、殊に甚だしく  
ごまかし主義だの、やらすぶつたくり主義だのと云  
ふ、奇抜な主義が殆ど社會の全般を支配する様にな  
つて来た、まして今日の様に物價が段々ご騰貴する  
に於ては自家保存の爲め、随分惡辣なことを遣らか



し、あひて 對手を悲惨な状態に陥し入れるが如きは、ことごと 事珍らしくもない、なかんてくそ 就中素質が善良に非らざる奴に、トツツカマツタ場合は、あだか 恰も蛇に見込まれた蛙の様に先へも後へも動きの出来ない運命に到着するのである、こゝ 茲に於てか吾々はかゝる危険を避くるため、じん 人心觀破的交際術を研究する必要があるのである、しか 然るに人の心は千差萬別で、おち 少しも同一のものはあ

い、むかし 昔時から『心の異なるは恰も面の異なるが如し』と謂つて居るが全くである、ゆゑ 故に之等を一般的に論ずることは出来ないが、かくじん 各人の特徴や、しよくゆふ 職業の如何に因つて研究するときには、そのせい 其性格の大體を知得し得るのである、はた 果して性格の大體でも知得し得られたときは、これら 之等に相當する交際術を各場合に適應するに於ては一面識もない人と雖も僅か五分間の短時間



はしがき  
を以て其目的を圓滿に選し得らるゝのである、諸君  
も之が研究を全ふし、其目的を達せられんことを。

大正十年一月一日

湯島切通の寓居にて

著者識す

## 目次

- 一、序言……………一
  - 二、先生の使ひわけ……………四
  - 三、馬鹿と阿呆……………七
  - 四、債権取立と金持……………一〇
- 目次



- 五、嬭ア天下とデモ亭主……………三三
- 六、藝妓とお客……………二五
- 七、小娘と鼻垂娘……………二二
- 八、外國人と日本人……………二四
- 九、娘と島田……………二六
- 一〇、箱屋と箆笥家……………二九
- 一一、職工と職人……………三一
- 一二、暢氣者と陽氣者……………三四

- 一三、妓夫太郎と金太郎……………三六
- 一四、娼妓と私娼……………三九
- 一五、學生と青年……………四三
- 一六、成金と金満家……………四六
- 一七、遣手婆と取手婆……………四八
- 一八、狼狽者と周章者……………五〇
- 一九、口八丁と手八丁……………五二
- 二〇、江戸ッ奴と東京者……………五五



二一、吝嗇ンボとしみたれ……………六  
 二二、大道易者と當るも八卦家……………六  
 二三、猫の兒と半揚……………三  
 二四、法界家と太鼓持……………六  
 二五、博士と薄士……………六  
 二六、官吏と公吏……………七  
 二七、軍人と兵隊……………七  
 二八、待合のお内儀と其の由來……………七

二九、女ボーイと仲居……………六  
 三〇、女結髪とおたんちゃん……………八  
 三一、看護婦と其の境遇……………八  
 三二、不良青年と放蕩者……………八  
 三三、下宿屋のお内儀と其の惡辣……………九  
 三四、天狗と高慢……………九  
 三五、惚け者と甘黨……………九  
 三六、おさんと女中……………九



三七、俳優と女優…………… 100

三八、醜男と色男…………… 101

三九、嚴格者と頑固家…………… 106

四〇、後家と未亡人…………… 107

四一、男妾とだるま…………… 110

四二、すけべと二本棒…………… 113

四三、守兒と小僧…………… 115

四四、女學生と處女…………… 119

四五、朝寝ぼうと晝寝坊…………… 123

四六、大乳の女との應接…………… 124

四七、小乳の女との應接…………… 126

四八、悲觀的の女と情的の女…………… 128

四九、交際家と外交家…………… 131

五〇、おてんばとすれつからし…………… 133

五一、屁理窟家とだんご理窟家…………… 135

五二、酒好きと酒狂者…………… 137



五三、樂天家と暢氣者……………一四一

五四、子可愛がりと親馬鹿……………一四二

五五、新聞記者と新聞家……………一四三

五六、芝居好きと芝居狂者……………一四六

五七、原稿家と筆耕家……………一四九

五八、迷信家と御幣擔ぎ……………一五一

五九、閑人と小人閑居……………一五三

六〇、狸親爺と九太夫……………一五五

六一、虚榮家と裝飾家……………一五八

六二、焼き餅やきとりん助……………一六〇

六三、小僧亭主と山の頭……………一六二

六四、無情者と薄情者……………一六五

六五、ヒステリーと神經家……………一六七

六六、東京者と應接……………一七〇

六七、大阪者と應接……………一七二

六八、京都者と應接……………一七五



六九、名古屋者と應接……………一七

附 録

社 術 交……………一八一

一、序 言……………一八一

二、交際の必要……………一八七

三、勤人と遊泳術……………一九〇

四、商人と外交術……………一九四

五、事業家と社交術……………二〇〇

交際秘訣の要件……………二〇七

自動的要件……………二〇七

一、總 説……………二〇七

二、人に好かるゝ交際は活潑なるべし……………二〇九

三、人に好かるゝ交際は誠實なるべし……………二一一

四、人に好かるゝ交際は常識に通ずべし……………二二四

五、人に好かるゝ交際は忍耐あるべし……………二二六



六、人に好かるゝ交際は清潔なるべし……………二二九

七、人に好かるゝ交際は自己の性質を知得し置くべし……………二三三

八、人に好かるゝ交際は品格を重すべし……………二三五

九、人に好かるゝ交際は禮場を重すべし……………二三七

一〇、人に好かるゝ交際は明確なる言語を用ふべし……………二三〇

他動的要件……………二三一

一、總説……………二三三

二、克く饒舌る人に接した場合……………二三七

三、無口の人に接した場合……………二四〇

四、度胸のある人に接した場合……………二四三

五、愛嬌のある人に接した場合……………二四四

六、活發な人に接した場合……………二四八

七、小心な人に接した場合……………二五〇

八、理窟を云ふ人に接した場合……………二五三

九、酒好きの人に接した場合……………二五六

一〇、芝居好きの人に接した場合……………二五八



一一、流行好きの人に接した場合……………二六一

一二、物好きの人に接した場合……………二六三

一三、留聲の好きな人に接した場合……………二六六

一四、大聲な人に接した場合……………二六九

一五、小聲の人に接した場合……………二七一

一六、聲の鋭い人に接した場合……………二七四

一七、詞の優しい人に接した場合……………二七六

一八、歩き方の亂暴な人に接した場合……………二七九

一九、落附のある態度の人に接した場合……………二八一

交際秘訣の内容……………二八四

一 一般的交際術……………二八四

一、總 說……………二八四

二、上級の人に交際を求める場合……………二八七

三、下級の人に交際を求める場合……………二九〇

四、嚴格な人に交際を求める場合……………二九二

五、神經過敏の人に交際を求める場合……………二九四



六、婦女子に交際を求める場合……………二九八

七、少年者に交際を求める場合……………三〇一

八、外國人に交際を求める場合……………三〇五

九、交際と贈答品……………三一〇

各個に於ける交際術……………三二四

一、總説……………三二四

二、法律家に交際を求める場合……………三二五

三、文學家に交際を求める場合……………三二九

四、醫師に交際を求める場合……………三三一

五、教育家に交際を求める場合……………三三四

六、會社員に交際を求める場合……………三三八

七、軍人に交際を求める場合……………三三〇

八、官吏に交際を求める場合……………三三三

九、職人に交際を求める場合……………三三六

一〇、學者に交際を求める場合……………三四一

一一、政治家に交際を求める場合……………三四四



一、辯護士に交際を求める場合..... 七

目次終

人をチャア應接の仕方

石角春洋著

一、序言

今日の社會は政治界にしる、官吏界にしる、實業界にしる、至る所常に絶えず、生活問題の爲め大騒ぎをやらかしてゐる、加之も案外粗末なパンの爲めではないか、其パンが得られないので、ごまかし主義だの、やらす應接の仕方



ぶつたくり主義だのと云つて、随分惡辣なことをやらかしてゐる、かうなつてくると世間體だけは至極眞面目の一生懸命に肩を入れてゐる様な面で、その實は相手の懷中物を當に角力をとらうと云ふ横着者が益々多いのである、若しかゝる人と交際をして互に利益を獲得しやうとしても、垣根の土持ちだ、之に反し相手方は濡れ手で粟の掴み取りを遺憾なく發揮して、とう／＼相手を破産の地位に陥し入れてしまふ、そのくせ形式は立派で賠償を取ることもさへも出来ない始末、茲に至つて吾々が事業を爲す上に於て必ず研究せなければならぬことは人心觀破的社交術である。

然るに現在の社會は、何人でも生活問題が、やかましくて中々無益の時間をつひしてはゐられない、昔から時は金なりと云つてゐるが全く現在の様に物質のみに遍し各人が生活難を稱ふる時代になつては其時間の尊いことは云ふまでもないことである、尊い時間を節約して、完全な社交を爲さんとするは最も困難なことである、併し如何に一面識もない人でも應接の際相手の眞相を觀破して接するときには僅か五分間の短時間で要領を得た交際を爲すことが出来る、兎角今日の社會では交際の妙義を理解してゐる者が成功を爲す時期であるから、須らく立身出世を爲さんと欲する人は交際



秘訣の要件を研究せなければならぬ、まして短時間の中に應接を爲し完全に交際を爲さんとするには、人心觀破的交際術を會得し之を各場合に應用するときには僅か五分間の短時間を以て圓滿に其目的を達することが出来るのである、以下次を別つて説明しやう。

二、先生

先生と云つても一樣には云はれない、政治家も先生、博士も先生、學士も先生、大學の教授も小學校の教員も共に先生である、又醫師も辯護士も大道易者も先生ではないか、かゝる先生達に應接するは如何なる方法に因

つて五分間の短時間で其目的を達するかと云ふに、先づ先方の真相を觀破し、其相手方の理想に近い方面を捉へて突進するのである、誰でも自己の理想と一致する様な話が始めれば快感を催すことは争はれない事實である、果して快感の情を催したとすれば其人を好くことは云ふまでもないことである、然るに先生と稱する人は概して理想に生きる人であるから、交際を爲さんと欲する人が品性を重じ、尊敬の意思を以て稍々煽動的に向へば必ず完全な交際を爲すことが出来るのである、然し今日用ひられつゝある先生の中には随分面白い先生もある、即ち困つた先生、呆れた先生、始末



に終への先生、先生それで済ます了簡か、先生ちと氣を付けるが宜いせと云ふが如き場合は多々あるが、こんな先生に對して、以上説へた交際術を應用しても馬の耳に風だ、先生違いだ、先生を間違えてはいかぬ、茲に先生と云ふのは、尠くとも理想に生きてゐる人であつて、何にかの眞理を會得し、又は半かちりでもした人を云ふのである、兎角先生と云へば鼻の高い高慢の人であるから、其高い鼻を崇拜する様にせなければならぬ、併し其鼻を崇拜することは中々困難である、餘り煽動的に過ぎると却つて相手の感情を害する様になるし、それと云ふて煽動的に出なければ高い鼻を

崇拜することが出来ないから其中庸をとつて突進する様にせなければならぬ。

三、馬鹿

馬鹿にも千差萬別、いろ／＼の種類があるが、先づコンマ以下の馬鹿と素馬鹿とに區別して見やう、コンマ以下の馬鹿とは普通以下の人間で、所謂世間に立つて一人歩きの出来ない奴を云ふのである、かゝる者に接した場合は威嚇的に馭するも宜しい、併し餘り強行に出ると恐れを催して信頼しなくなる、故に彼を馭するには先づ煽動的に出でなければならぬ、又



時には威嚇を用ひる様にせなければならぬ場合もある、昔から馬鹿と木炭とは立てなければをこらないと云ふが全くだ、煽動的に出られるとお馬鹿さん得意になつて、如何なることもやらかしよるが反對に出ると容易に馭することが出来ない、次に素馬鹿と云ふ奴だ、智慧がない者必ずしも馬鹿とは限らない、智慧があつても役に立たない奴が即ち素馬鹿である、此の馬鹿は一見した計りでは少しも馬鹿とは受取れない爲すことすることにした、いした間違た點がないが、時々長たらしい無用の議論をしたり、入らざる、入らざるに餘計な理窟を並べたりする、一種異様の人物である、かゝる人に接

して短時間で要領を得るには餘程骨が折れることである、此の馬鹿に對してはコンマ以下の馬鹿の様に單に煽動的方法のみでは其目的を達しられない、先づ之を馭するには先方の意見を尊長して煽動的に突進する場合と單刀直入に彼を制する場合とがある、前者の方法に出る場合は相手が剛情な粘液性の質を帯びてゐるときに適用すべきものである、後者の方法に出る場合は相手が、ズウ／＼しい奴で速断心に缺けた者に對する場合である、何れにするに之等の人に對して短時間で要領を得様とするのは餘程困難な問題である。



四、債權取立

凡そ吾々は自己に利益の伴ふときには進んで之を爲すも不利益が生ずる場合には退いて之を爲さないのが普通である、殊に債務を帯びた場合などにあつては進んで其債務を辯済すべきものであるが、時によると何等かの理由を附けて之を拒む者がある、かゝる場合に其債權を有する者は法律の保護する處に依つて其債權實行を完うするに於ては何等問題は生じないが斯くては種々な弊害が生ずるので、可成訴の方法に據らずして債權の實行を全うすることを考究せなければならぬ、さうして訴の方法に依ら

ずして完全に債權實行を得んとするには、相手方に對する外交如何に因るのである、然らば如何なる外交を以て之に應ずれば其目的が達しられるかと云ふに先づ相手方の真相を知得することが肝要である、さうして其人の真相を知得した以上は債務の辯済を請求する場合に於て其性格に反しない様に注意して請求せなければ其外交は失敗に終る場合がある、例へば剛愎な負けざらいの人に正面から催告するが如きは不可である、必ず相手方の感情を害しない様に注意して巧妙に而かも煽動的に出でなければならぬ然るに不活發で事に當つて速斷心のない人に對した場合は單刀直入に正面



から嚴しい請求をする様にせなければ決して短時間の中に其目的を達することが出来るものではない、總て此の理論に因つて先方の機先を制する様にして、債權の取立を爲すときは訴の方法に因らず而かも相手方の感情を害せずして容易に其目的を完うすることが出来るのである。

之と反對に債務を負擔してゐる場合に債權者の請求に遭つて延期を求めんとする場合に於ても、亦債權者の性格を知得してゐて、其人の最も愉快とする處に向つて談話を始め快感の情を奮起させ、さうして自己の目的とする延期を持ち出す様にすれば容易に債權者の請求に對する防禦方法を完

うすることが出来るのである。

五、嬖ア天下

心の曲つた女と來た日には、箸にも棒にもかゝつたものでない、強行に出るときは是非善惡を論せず、理非曲直の如何に關せず、立腹して恥も人情もかまわず、大騒ぎをやらかす、そのくせ優しく出た日にはつけ、上がりやがつて男も何もあつたものでない破利慘暴を極めるのが常である、故に昔から女子と小人は養ひ難いと云ふが全く然りだ、餘り怒ると悲しくし、可愛がり過ぎると増長して、おてんばを極め込んで、誰彼のようしやなし



に辱倒する様になる、まして心の曲つた女が嬢ア天下となつた日には、それこそ大したものだ、亭主は勿論姑でも他人さんでも、一向平氣の平藏をかまへ込み、得意の我が儘を持ち出して、自分勝手の理窟を比べたがる、さうして我より他に優つた女はないと云ふ様に思つて、誰でも目下の人と愚考してゐる、かゝる女の心理状態を研究して見ると實に淺薄な思想の奴だ、斯の如き愚者に對し知時間で要領の得られる應接は如何なる方法に出ずれば宜しいかと云ふに、彼の機先を制するは先づ煽動的に進まなければならぬ、奴煽動されると非常に喜びを催し、アバタ顔でも絶世の美人の

如く思惟し、一割低い鼻も一時に高くなつた氣になつて得意の理窟もやはらみ、胸倉も取りかねまじき勢ひも、何處かへ去つて、相手の要求も自然に入れるのが一般である、茲に於てか五分間の應接者は何んなく心の曲つた嬢ア天下の鼻先を折ることが出来るのである。

六、藝妓

男なら如何に氣むづかし家でも、亂暴家でも、堅い／＼堅藏君でも、いつかは歴二つで降伏させると云ふ立派な腕のある奴は藝妓である、まして今日の様に社會が物質主義に傾むいて各人皆快樂てふことに精神を捉られ



てゐる時代にあつては藝妓の腕前も格別なもの、さうして多くの藝妓には戀と云ふことはなく、只金持つて來いの戀があるのみで、惚れた腫れたと云ふことは毛頭ないのが藝妓稼業の本分である、故に金取る爲めには、とさも惜しまず、勞を厭はず、犠牲になつて働くのであるから、時に因ると随分惡辣な手段に出で、遊客を苦しめてゐる様だ、即ち朝に東客を迎へ夕に西客を送つて、何時も定まらない遊客を對手に一切平等の待遇を繰返し天井の節穴數へをしてゐるので随分社交は巧妙なものである、自惚の強い好男子君、それと知つて因果又知らないでか、其冷たい戀に翻弄されて

丸裸果になる異様のお方も案外尠なくない様だ、言葉を換へて云へば藝妓と云ふ稼業を有する商人の掛引である、甘つたらしい詞が意外に御意に入つて眞の詞と取り違へ、まんまと其の巧妙な懸引に釣り込まれて、思はず取り出す懷中物、之が度重なるに遂には父母との衝突や夫婦げんかや色々六ヶ敷問題が生じて來ても、そんなことは他所ごとく素知らぬ顔して、男を泣かせる頗ぶる勘定高い腕を持つてゐる奴は藝妓と云ふお方とは驚いた、然しこんな論法で藝妓先生を罵倒しながら、つか／＼お通ひになる方もないわけでもない、かゝる人は藝妓の戀が金持つて來いの戀と百も二百



も承知してゐながら、色白の滑らかなやさしいお手で肩の一つもぶたりやうものなら、それこそ鉛の様に溶けて流れるのが一般である、其弱點を捉へた藝妓先生えたりとばかり木刀振りかざし眞正面から突進されるので、いつかな堅藏君も木刀先がにぶつて、たち／＼たちと退却する中に遂に溶けた鉛は自由自在に玩具にされ、或は金時計や着物の形に造り上げられて二人で早速三越や白木屋へ自動車でかけつけたり、或は金銭の形に組立てられて懐中搜索を開始されたり、或は不用物と見たら、遠慮容赦も荒波のどん／＼棄てられるのが常であるとのこと、驚くべし、驚くべしだ、こん

な方法で翻弄されるのであるから、遂に財産も、家屋も、最後の妻子も犠牲にしてしまう場合も随分尠なくない。

斯の如く藝妓先生男に向つては天下無敵の外交手腕を持つてゐるが彼には又弱い悲しい所がある、故に其弱點を捉へて彼に應接したならば、如何に彼が天下無敵の外交手腕を有すと離も反對に、ころりと男の鬚に巻きこまれてしまふのである、藝妓と云へば多くの酒客に接し上下の區別なく一切平等の歡待で遊客の對手を爲し、厭な客でも嫌ひな人でも、老若の區別なく平等の取扱ひをせなければならぬ、即ち厭だ嫌ひだと云ふことは一



切禁物である、故に藝妓自身にとつては随分苦しい場合もあらうし、又悲しい淋しいことも普通人に比して最も多からうと思はれる、さうして藝妓になつた原因を考査して見るに固より同一ではないが多くは家庭の事情が斯くの如く墮落せしめた場合である、故に家庭の趣味はなく、孤獨の生活を爲してゐるので表面から考へた程彼等の心理状態は簡單なものではない中には随分理想を懐いてゐるものも尠なくない、併し藝妓と云ふ稼業を永く持續してゐた者は悪風に感染して理想などは毛頭ない奴がある、かゝる奴は最早物質上の慾望を超越して、自由な我が儘な生活を持続することが

彼にとつて最大の慾望であるから、斯の如き女に對しては目前の快樂を其儘其所で、表現する様にすれば彼をして快樂の情に支配させることが出来るので短時間の中に要領を得るのである、又彼等は最も自惚が強くなつてゐるから煽動的に突進するのも宜しい、若し反對に出るときは理非の區別なく反抗してくるのが一般であるから力めて反抗心を惹起させない様にせなければならぬ。

七、小娘

小娘と云へば十五六のまだ肩揚の深い、あどけない可愛らしいものだ、



所が近頃の娘は、中々隅にをけない處がある、何處までも子供ご思へば、  
 どうして大膽にも油断も隙もあつたものでない、天神様へ詣つても観音様  
 へ參つても、何時でも好きな人と添してくれなど、云つて祈願をしてゐる、  
 その祈願が中々面白い、どうか後生ですから天神様観音様あの方と添して  
 ください、之が何よりのお願ひですなど、云つて心の底に取りとめのない  
 淡雪のやうな初恋が漲ぎつてゐる、甚だしきに至つては娘の方で勝手に引  
 かけるかも知れない、思ふに十三四才より十五六才に至る間は身體上及び  
 精神上著しい發達を爲す時代であるから、言語には音聲の變化あり、味

覺には嗜好の變化あり、其他身體の構造が一變するのである、従つて性質  
 にも大變化を來す時代である、即ち此の時代の氣質は比較的小心であつて  
 物事に感染し易く而かも冷め易くて、活發であるが忍耐に乏しいのが普通  
 だ、殊に少女が男子に接するときには其性格に著しい變化があるさうな、  
 何れにするもかゝる者に對して短時間で要領を得る様に應接するのは如  
 何なる方法に出るか云ふに、先づ彼の好奇心を捉へて煽動するのであ  
 る、さうして彼等の好奇心も種々變化するので、其變化に伴つて適當に之  
 を馭す様にせなければならぬ。



八、外國人

古代では外國人を適視してゐたが、社會が漸く進歩して來たので、外國人でも必ず適視すべきものでないことを覺るに至つたが未だ、内國人に比して、劣等の者の様に思はれてゐた、然るに社會が進歩するに伴つて交換の途が開け、お互に利益交換てふことが行はれるに従つて内外人を區別すべき理由のないことを自覺する様になつたので、何れの國でも内國人と外國人とは平等の地位を有し、互に利益の交換をなしてゐる、殊に近代では外國人と交際するのを名譽の如く思惟する様になつたので各人競ふて外國人

と交際することを望んでゐる、茲に於てか外國人と短時間の間に於て應接することを研究せなければならぬ。

抑も外國人は本國を去つて遠き外國に來つて住居するものであるから、如何に強膽な人でも淋しさと不安の念とは幾分か存するのが普通である、尠くとも排外行爲に出でなければ、いゝがと云ふ懸念は確かにある、即ち人情として生れた國にあるよりは、心の落附がないのが常である、故に我國人が、外國人に對して誠意を以て交際をしたならば、必ず深く信ずる様になることは云ふまでもないことである、如何に内外人平等の文明の今



日と雖も、或は外國人と見たら暴利を貪らんとする今日に於て外國人たる者は之が損害を排斥する様に、常に心懸けてゐるのは疑はれない事實である、然るに誠心誠意の日本人を得るときは、かゝる損害を未發に防ぐことが出来るのみならず、心強く愉快に生活を持続することが出来るに因り、常に外國人は斯の如き誠意の人を得たく心懸けてゐる様である、果して然りとすれば此の弱點を捉へ誠意を以て應接すれば、必ず短時間でも要領を得る應接が出来るのである。

九、十八

鬼も十八、番茶も出花と云ふことは昔から稱へられてゐる、其昔は到底その容貌の十人並に届かない女を、青春の妙齡に對して聊か慰めん爲めに、出た詞であるが、今日では鬼でも蛇でもあばた面でも女の十七八と來た日には天女の如くに拜し奉り、尊敬すること恰も番茶の出花を玉露の如く有難がり、白く塗れる顔は、番臺面でもお龜面でも、一切之を美の美として、目鼻立の奈何は何等問題にしない、太つた女は愛嬌の源だの、曲線美の圓滿だとか、瘦せた女は理想に豊富だとか姿勢美があるとか、色黒の女は壯健で現在向だとか、理窟を附けて、只だ皺さへ寄らず、腰さへ曲らぬ



女は總て夢が夢中に美人と心得てゐるは笑止く、斯の如き今日であるから、番臺面の女工君でもおさんどんでも、十七八と來た日には中々鼻いきが荒い、ヒョットコ面でも向つて醜婦の醜の字でも云つた日には、御機嫌なゝめでない、然るに上品でいらつしやるとか、又は姿勢美があるとか申上げると、得意なこと格別なものだ、用事を依頼しても返事と同時に之を達してくれる現金なこと驚くべしだ、何事も之の論法に依つて彼を馭すときは、如何なるおてんば先生でも圓満に馭することが出来る、まして短時間間の應接に於て要領を得るには相手の感情を害しない様にせなければなら

ない故に彼の虚榮心に向つて煽動するときは短時間の中でも要領を得ることは疑ない事實である。

一〇、箱屋男

世の中が物質文明になると、猫でも杓子でも金錢さへあれば天下様だ、金の爲めには名譽も地位もあつたものでない、金錢の前には博士でも學者でも、乃至は妙齡の美人でも賤つく、此の世の中に、猫の尻を嗅ぐ箱屋君も御座る、これは年中いつも蘭麝の香に打たれながら生き伸びてゆく野郎さ、五體に骨はあるが此の世は何の目的ぞと友朋輩に問はれても、唯ひこ



り笑を含むのみ、その笑たるや意味深長である、その笑こそは物質文明の半面たる、快樂主義を如何なく現はしたのだ、口では云はないが、えへんお前さんの様に一生あくせく心痛の中に世を送る、鹿馬な野郎さんはありませんよ、私なんか猫の尻を嗅ひではあるものゝ、何日も蘭麝の香に浮世を面白く笑しく生活、のらりくらりで世を送つて居られるのんきさ、乍障チンくながらお前達より確かに十年以上は永生きをするよと云はんばかりの、案外深い意味を有してゐる、併し他人の眼から之を見ると泣いたのか怒つたのか笑つたのか、更にとんちんかんちん差別ない醜男だ、さう

してかゝる野郎は案外世事に習れてゐるので一筋縄や二筋縄では中々うまくは取することは出来ない、併し彼は物質慾てふことが人一倍に發達してゐるので、此の弱點に伺つて突進すれば容易に彼を取ることが出来ることは火を見るより明である。

一一、職工

近代では職工君も中々腕が鋭くなつた、時々賃金値上だの同盟罷行だのと云つて企業家をなかせられる様になつた、それも其はづ職工の技術如何によつて其國の物質文明が判明と云ふ程職工の技術が貴ばれる様になつた今日

應接の仕方



だもの、職工が勢力を占めるのは當然である、併し企業家にとつては御氣の毒さ、事業家は是まで餘りに職工君を虐待した反映と断念てゐる様であるが、中々断念められぬ様子である、こんな有様で職工の地位が認められて来たから職工君の方でも、今少しは人格を高める様に注意し給へ、之までの様に亂暴な無作法な無教育極まる振舞は止め給へと云ふのは將來のことだ、これまで職工君の地位が低かつた爲めか乃至は又事業家が餘りに虐待し過ぎたのか、實に亂暴な無法な者が多い、さうして職人職工自身に於てま亦自己の地位を認めない様である、往々世上で見るに自分は職工で

あるから無作法でも亂暴でも乃至は無常識でも尠しも社會に恥づる處はないなど云つて猥りに無作法なことをしたり、亂暴な行爲を行つて、盛んに無常識を極めてゐる、かゝる人に短時間の應接で要領を得んとするには餘り謙遜過ぎては却つて失敗する、何となればこの種の人には以上説いた通り習慣が亂暴に無作法に仕立ゐるので兎角自由な無作法な生活を持続してゐる故に、俄かにしかつめらしいことを云はれると却つてそれが嫌な感じを惹起するのでこの種の人に對する場合は成る可く、坦白に而かも簡單に六ヶ敷詞を使はない様にして應對せなければならぬ、即ち感情を害し



ない限りは一刀兩斷に突進すべきものである。

一二、暢氣者

世の中には随分暢氣な人もあるものだ、好きな道にかけては萬障を差繰つて、忙がしい中から遊ぶことに腐心してゐる奴がある、こ奴の言草が中々面白い、生命あつての物種だ生命の洗濯だと理窟を付けてゐる、成程忙中に閑をこしらへて一日の遊興は、生命あつての物種、生命の洗濯に相違なからうが、何日もぶらりくらの遊興は、生命の洗濯には餘りに縁が遠過ぎはしまいか、洗濯と云ふものは汚れたときにするものであつて、汚れ

もしない、物の洗濯は返つて其ものゝ爲めにならないではないかと云へばいや決してそうでない朝から晩まで眞黒になつて働き乾燥かけた脳味噌を無暗矢鱈に虐待して、彼れの是れのと追つ駆け廻つて横死するも、ぶらりくらりて浮世を過ごし、したい三昧遊興んで横死するも、矢張一生は一生だ、兎角浮世は暢氣がもの種だ、何も苦しんで脳味噌を煩す必要はないのだと、得意になつて、音遊興にのみ精神をとられてゐる暢氣な野郎もある、かゝる暢氣な者を捕へて短時間で要領の得る話をするのは實に困難である、併し彼等は如何に根が暢氣者でも遊興を業としてゐるだけ、世事にた



けてゐて、常識に通じてゐるから、案外判断は早い、即ち自ら粹士通人を以て任じてゐるだけあつて常識には可なり秀てゐる、故に彼の感情に反抗しない限りは要領を得ることが出来る、さうして暢氣者のくせに天狗鼻の者が多いから、其鼻に觸らない様にしてゐなければ其應接は失敗に終ることがある。

一三、妓夫太郎

妓夫太郎と来た日には、猫の尻を嗅ぐ箱屋君より一枚上だ、ぶらりくらしで晝は過ごし、晩になると例の妓夫臺から、夜半に至るまで、先生、親

方、ちつ／＼と、御相談があります、一寸／＼までゐらつしやい、へ／＼／＼お手軽さまに、極安値に決して餘分の御散財は掛けません、お試しに今晚一晩だけお遊興を願はれますまいか、娼妓衆も揃つて居ります、部屋も空いてをります、へい／＼へい、何うせお馴染もござんしやうが、是非今晚は手前どもへ、そこらはお氣に召しませんか、そこらなら立派なものですと、殆ど嘘言八百を機械的に並べ立て、客を引く有様は實に鋭いもんだ、奈何に賣物に花を飾れと云ふことがあればとて妓夫太郎の様に娼妓を賞る者は世界廣しと雖も他に比敵するものはなからう、一つのものを



百に云ひ百のものなら萬に云ふ論法で、客を引く巧妙さは天下第一品だ、さうしてこ奴の履歴を調べて見ると實に驚くべしだ、只だの鼠ではない、歴々たる者ばかりだ、官吏の失敗者もあれば、新聞記者の出来そこないもあれば、會社員の免職家もあれば、乃至は商人の敗残者もあり、さうして總て妓夫太郎君は常識には長してゐる、即ち世事に明るくて人を見るの才能を有してゐる、如何に元が學者であつても墮落の結果妓夫太郎にまで、なり下つた者だけあつて、快樂てふことが頭の全部を支配する様になつてゐるので、快樂より以外に何もものも眼中にない、故に浮世を茶にごし、魚心

あれば水心ありと云ふ、筆法で人に接してゐるので魚心を用ゐるときは格別此の心が無いときには、中々要求に應じない、まして短時間で要領を得んとすれば妙くとも其心掛けがなければ其目的を達することは困難である。

一四、娼妓

娼妓と云ふ奴は魔力を以てゐると見えて、如何にきびくした男でも容易に手玉にとつて翻弄する鋭い腕がある、おそろしい奴だ、さうして惚れた腫れたの心中立は御無用と頭に印せられ男なら、色男でも、醜男でも、堅



い／＼堅藏さんでも、何のこともない罎二つで百度以上の高い熱を起させ鉛の様に溶けさせ、懐中物を自由自在にする奇妙な腕のある女である、そのくせ戀と云へば金持つて來いの戀があるばかりで、刺せば怖ろしい針もつ蜂にも甘い密とやら、その甘い密が慾しい爲めに行く密家の弱點、早くも之と覺つた娼妓先生、得たりとばかりに木刀振りかざし、眞一文字に突進するので、いつかな堅い／＼堅藏君も、忽ち降伏して講和談判を開始する其談判の結果、賠償金が馬鹿に高い、併し高いと思つても口には出せない若しそんな野暮なことでも云はうものなら忽ち糧食問題に不自由を感ぜ

させるので、先づ高い賠償金でも支拂ふと云ふ有様、實に娼妓てふ奴は奇妙な化學作用を理解してゐるので、奈何に冷めたい、堅い者でも、之の化學作用にかゝれば百度以上の高熱を起し、如何なる高い賠償金でも、いつかな閉口せずに支拂ふのが常である、こんな論法が、男に對する外交手腕は又格別なものである。

さうして彼等は最早色の戀のと云ふことは飽き果て、只だ一に金持つて來いの戀に鍛鍊あげられてゐるので、金を取ることなら、時も勞も惜まらず惡辣なことでも何とも思はず、どし／＼やらかす、さうして彼等は只だ



自由な我が儘な生活をして面白笑止く一生涯を送りたいと云ふのが最大の慾望である、尙藝妓と同じく家庭的の趣味はなく孤獨の生活を持続してゐる爲め、寂寞を感じ前途を悲觀し、苦しい中に月日を過してゐるので遂に精神は腐敗し墮落の淵に倫落して終うのであるから多くの人を翻弄してゐるに比して、弱い悲しい處がある、其弱點を捉へて彼に對したならば、彼をして自由の人たらしめることが出来るのである。

要するにかゝる女に對し短時間で應接の目的を達しやうとするには、彼の墮落に相當する嗜好に向つて突進する様にせなければならぬ即ち彼の

氣に合ふ方面から進んでゆかねばならない。

一五、學生

近頃學生の思想が著しく腐敗して、まだ肩擡のとれない、あどけない中學生が下宿屋の四疊半へ、首の白い奴を引こんで、巫戯け廻つてゐる、偶々忠告する者があれば口嚙泡を飛ばせて辯解する、その云ひぐさが至極面白い、曰く昔時と變つて今日は物質文明の世の中さ、だから其物質文明に伴はない奴は時代錯誤に陥つてゐる、脳味噌の不足な先生さ、結局社會の進歩に伴はんとすれば、物質てふことを度外視してはならないのさ、



君等の様に精神上の慾望云々と云つてゐると、社會の人が時代錯誤の人として相手にしなくなるよ、見よ社會は物質文明ではないか、既に物質文明とすれば其半面には快樂主義てふことは免れない事實さ、云はゞ物質文明と快樂主義とは、恰も鎖の兩端の様なもので離れることの出来ない關係にあるのさ、故に吾々は社會の進歩に伴つて其物質文明の一面を現はしてゐるのだよ、否な社會の進歩が吾々をして物質文明に導いてゐるのだよ、  
 、、、之は實に驚いたねえ泥棒にも三分の理窟と云ふが全くだ、つまりない所に理窟もあればあるものだ、こんな理窟を列べて立派に一人並の者

の様(やう)に思(おも)つてゐる奴(やつ)の氣(き)が知(し)れない、こんな奴(やつ)の面(つら)は人間(にんげん)の面(つら)ではなからうか、否(いな)な矢張(はり)人間並(にんげんなみ)の面(つら)だけはしてゐる、例外(れいがい)はさて置き、學生(がくせい)と云ふ者は將來國民(しやうらいこくみん)として社會(しゃくわい)に中流以上(ちゆうりゅういじやう)の地位(ちゐ)を占め國家(こくか)に貢獻(こうけん)すべき有望(いうぼう)な青年(せいねん)である、故(ゆゑ)に德育(とくいく)知育(ちいく)が共に具(そ)つてゐなければならぬ、又常に精神(せいしん)上の慾望(よくぼう)に生きてゐなければ到底學生(だいていがくせい)の本分(ほんぶん)を全(ま)ふすることは出来(でき)ない、さうして多數(あまた)の學生(がくせい)は精神(せいしん)上の慾望(よくぼう)に生きてゐるのであるから、之等(これら)に對(たい)する、應接(おうせつ)は高尚(かうしやう)にして品格(ひしかく)を重(おも)じてゐなければ馬鹿(はか)にする様なことがあ  
 る、若し少(すこ)しでも馬鹿(はか)にする様なことがあれば、到底短時間(だいていたんじかん)の中に要領(えうりやう)を



得る應接は六ヶ敷、併し一般に學生は無頓着で、誠意があるから單刀直入に要求するも要領を得ることが出来る人である。

一六、成金

此頃は戦後の影況を受け成金がどしどし増へて來たので、猫も杓子も成金風を吹す世の中に、案外慈善と云ふことは進歩しない、それもその筈例のやらずぶつたくり主義だの、ごまかし主義だのと云つて色々な主義の爲めに、成金になつたのだから、慈善などをすると矛盾して理窟が合はなくなる、併し偶々矛盾して寄附などをする奴がある、さうして其寄附の額が

餘りに多う過ぎるので、感心してゐると、豈に計らんや、其寄附によつて廣告を爲し、其寄附以上の利益を得んとする、賣名の徒でないか、驚くべし、嘗つて萬朝報の漫畫に世界の金満家であるカーネギ氏が自分の氣に向いた事なれば幾千萬圓でも寄附すると云ふことを聞きかちつて居る日本の成金先生得意になつて乃公と同じことだ、乃公は好きな氣の向ひた藝妓になれば幾千圓でも寄附するんだから大同小異なんだと云ふ意味であつた、誠に克く日本の成金先生の真相を看破してゐる畫である、之れによつても日本の成金先生の素性が判断されて終う、さうして日本の成金先生



は奸商人のくせに中々鼻が高い、其高い鼻に無暗矢鱈に觸らうものならそれこそ大變應接もなにもあつたものでない、驚くべき立腹さ、故に鼻を大切にあんまでもとる様にせなければならぬ、鼻のあんまさへ上手にそれば其應接は上々吉である。

一七、遺手婆

婆さんく此の婆さん、婆さんお前は頗る腕の鋭い婆さんだねえ婆さんく此の婆さん、婆さんお前は甚だ勘定高い婆さんだねえまだく婆さんあるけれど先づ此の邊で止めるとしよう、併し婆さん浮世を茶にして、し

たい三味に耽る暢氣者の骨頂惻怛と馬鹿の間者を馬鹿にするのは當然だが冷いく堅いく堅藏君をいつかはころりと降伏させる腕は立派だねえ、二本棒の鼻毛をぬくのはやすけれど粹人通客の懷中物をしぼるにはちと面倒だらうねえ何にさ勘定高いと云はれた婆さんだ、そんなことに凹む様な婆さんではないよ、昔時とつた杵柄は今尙ほ確かなもんだ、全くだ懷中物を痛めないときは口一つきかないが、少しでも懷中物を痛めた日にはそれこそ下にも置かぬ取扱ひ、奈何に客を引く商賣とは云へ、餘りに勘定高過ぎやしないか、兎角あの一廓は別世界だから仕方がないさ、こんな風習が



廓全體を支配する様になつてゐるので、婆さんなんか嫌と云ふ程練磨されてゐる、かゝる婆さんに對し短時間で要領を得る應接をするには、要件の内容如何に因つては反對給付と云ふことを忘れてはならない、反對給付さへあれば婆さん全力を注いで進んでくる、反對給付を要しないときは、可成活潑に淡白な態度で而かも樂感的に應對する様にせなければならぬ。

一八、狼狽者

狼狽者と來た日には、論にも、杓子にもかゝつたものでない、一里も離れた所に小火があつても狼狽くさつて、共同便所を交番所と取り違へ、無

暗矢鱈に禿頭を下ながら、巡查さん、た、た、大變ですすぐそこが大火事ですと云ひながら「二本橋の區役所」でお産の最さい中の人の胸倉をとつて引づりだすと云ふ醜體さ、實に驚くにも餘りある馬鹿野郎ではないか、そのくせ人の云ふことを克く聞もせず判断もしないに早や合點をなし、それを得意になつて他人に觸聽する滑稽さは又格別、書籍立と云へば献立を出したり、うどんと云へばたどんと違へたり、ナイフと云へば金袋を與へんとするが如き場合は數限りない、又羽織や着物を裏に着て、眞面目で得意然として天下の往來を歩むも笑止ではないか、狼狽者は總てがこんな有様



であるから、人と應對しても間のぬけたものだ、かゝる人と短時間の應接で要領を得させ又自己に於て要領を得んとするのは甚だ困難である、併し彼は狼狽者だけあつて、充分な熟慮に出でなくとも諾否を爲す人である此の點は簡單であるが後日に於て取消れる様なことは此の種の人間に最も多いから、克く彼をして要件の内容を獲得させた上念を押して置がなければならぬ、狼狽者に對した場合には落附て事を爲さなければ失敗に終るのである。

一九、口八丁

口八丁手八丁と云ふことは、昔時から克く云ふ詞である、全く口八丁の者は手も克く動くし、一寸きてんがきく人間である、殊に口八丁で長屋のおかみ様と來た日には外では井戸端會議の會長から、長屋の辯護士などを勤める奴だ、内にあつては嬖ア天下と極めこんで内政外政を問はず、亭主を指揮し一家を統率する御大將である、こんな有様で得意のおてんばを發揮してゐるので自惚の強いこと驚くべしだ、亭主なんかイ理屈でも云はうもんなら、それこそ大變山の頭の本質を遺憾なく現し、亭主を破倒する口頭辯論はすごいものだ『何んだつて、お前さんの様な生氣地のない者で



も亭主と思へばこそ臺所の水瓶と同じやうに、年が年中冷たく扱はれて居るのだよ、お前さんの様な天保錢と同じやうに足りない者にこんな立派な嬪が、文句も云はずに働らいて呉れる有り難さを知らない奴があるものか本来なれば私なんか立派の家庭の奥様になれる身分ですよ、それに出雲の神様が人もあらうに、お前さんのやうな薄馬鹿の人と縁組をさせたのは神様が誤りなんだよ、それにお前様あり難さを忘れて、理屈なんか云ふとは何事です、餘り増長すると出雲の神様に申譯がありませんよ、少しは注意しなさいと今しも胸倉でもとらんとする、すばらしい勢である、實にあ

されたものだ、何處が増長して居るのだから、とんちんかんちん、區別たもンぢやない、併し案外口八丁の奴は常識に通じ易い質であるから、外交でも内政でも上手な所がある、さうして外交手腕があるだけ、判断も早いし早断することも出来る奴だから、五分間の應接で要領を得る人間であるが要件の奈何にしろと随分理屈を列べる奴だから其理窟を列べさせない様に機先を制することが必要である。

二〇、江戸ッ兒

江戸ッ兒と云へば瘦せ我慢と負け惜しみの固まりであつて、活潑な無邪



氣なまじりけのないものである『江戸ッ兒の生れ損ひ金溜める』とは古き川柳の江戸自慢の詞である、全く宵越しの錢を持たぬと云ふ肌合も、大川で尻を洗つた様にさつぱりと氣持はよいが、實は宵に持つ金がないのかも知れない、併し昔時の江戸ッ奴は何と云つても、さつぱりとして氣持のよい奴が多かつた、兎角今日の江戸ッ兒の様に鼻先ばかり強いのでなく眞に淡泊な質の者が多かつた様だ、克く講談家が云ふことだが、金を拾つた者が投し主が判明つたので早速それを届けてやつた、所が投した者はお禮を云つて受取るかと思へば、あゝそうか併し其金は貫公が拾つたのだから貴

公に呉れてやる全部しまつて呉れ、と云へば有難う頂戴するかと思ひの外馬鹿にするな乃公が取るくらいなら此所まで、届けには來やしねえ、テメイの金かたら貴公しまつて置け、イヤ乃公は投した以上は無ものと斷念てゐたのだから貴公しまつて置け、と云ふあんばいで遂に、どたんばたんの大騒ぎをやらかす始末、世の中に金の取りやいで、どたんばたんをやらかす者は随分あるが、金の與りやいで、どたんばたんの大騒ぎをやらかすとはちと現代向から遠ざかつた話だが昔時の江戸ッ奴は、随分やりまじきこともなかつたらう、今日では江戸ッ奴と自ら任じて居る方でも、こんな淡泊



なことは一日もして居られまい、併し今日の江戸ッ兒でも氣の早い點と鼻ッ先の強い所は確かに残つて居る、故に江戸ッ奴風を吹かせる奴に對しては煽動上げて怒らせれば、幾程でもあるだけの金を出して終う奴だと、關西の生温ッこい先生の見くびり言葉である、全くそんな傾があるかも知れない、さうして判断もしないことでも判断つた様子で早受合をする風があるから短時間の應接で要領を得るには便利かも知れないか、何に分鼻ッ先が強い奴だから、感情を害しない様に力めなければならぬ。

二一、客齋ンば

客齋ンばお前と來た日には、五分間應接の主稱者も困つて終うよ、客齋ンばのくせにわからず家の理窟家で、お負けに甚助ではないか、イヤ客齋ンば必ずしも甚助でないよ、併し餘り客齋にするると勢ひ甚助を極め込まなければならぬ場合がある、客齋ンばの甚助先生が随分滑稽をやらかす場合は尠なくない、殊に遊興の場合などは有名なものだ、客齋で甚助でお負けにわからずやと來たら、何處へ行つても待遇このない品物だ、女を見れば、ニコ／＼として居ても金と來たら早速懷中物の御用心と計り確乎り握つて面膨らせる様子は、奈何にも待遇つこのない確證だ、併し勃々たる野



心が募つてくると清水の舞臺から逆飛びでもした氣になつて人が圓助出す所なら、自分は半助も出す始末だから面白、甚助を起さない様にしやうとして居ても餘り虐待するので、遂に本性を現はして終うのだ、さあ甚助が始まると遊女の奴面白半分で自裂す、カウなると可愛想なのは客齋ンぼ先生、自暴になつて取出すのは懷中物、結局客齋にした爲め人一倍の散財なんとまんが悪いことだしよ、遊女はかゝる手段で懷中物のしぼり方を知つて居るが、吾々に於ては簡單なものでない、まして五分間と云ふ短時間の應接で要領を得んとするに於ては尙更のことである、かゝる者に對

しては誠意を以て利害得失を説き、彼をして物質上の慾望を懐かせる様に導かなければならない、若し物質上の慾望を懐いたときは、其慾望の爲めに支配されて要件を入れるやうになる。

二二、大道易者

夜になると境内や町の辻々に、當るも八卦、當らぬも八卦を極め込んで盛んに客を引き込まんとして力めて居る、若し、貴君ちよつと此所へ來らつしやい、貴君の人相は實に立派なものです、人相お手相はたゞ觀てあげます、貴君は近い中に幸福がありますよ、兎角人間は運勢が向ひたとき



に、それを取り逃がすと一生涯成功が出来ませんから、今の中に研究して置かなければ、時期が過ぎると取り返しが付きませんよ、など、口から出任せの詞を比べ好奇心を引かんとしてゐる所は、恰も妓夫太郎が妓夫臺から遊客を引く手管と大同小異である、併し妓夫太郎から見ると、こ奴ツは餘程弟だ、さうして晝はぶらりくらりで過ごし、其夜くを當るも八卦、當らぬも八卦と極めこみ粥も飲めない日も、一本お酒をつける日も、平均にしたい三昧暢氣に日を送るも亦面白からう、かゝる者に對し五分間の應接は如何なる方法に依るか、大道易者と來たら案外すれつからしの理窟家

だからこんな奴にかゝつたら一刀兩斷に頭から、ビシリとやつけるのさ、くだらない理窟を云はせた日には到底彼を服することは出来ない、そのくせ理窟を云ひたがるから機先を制するやうに注意してゐて、ビシリやるにしかずだ、併し中々、づうくしいから容易には凹まんが、機先を制するに於ては、判断が早いから目的が達しられる。

二三、猫の兒

猫の兒と來たら可愛らしいこと他の動物の遠く及ばない程である、まして人に馴れ人を慕ひ、無邪氣にジャレるに於ては一層其愛嬌を増し、人を



して寵愛せしめる素質を有してゐる、殊に此の愛らしい奴が無邪氣に而かもあどけない舉動で、色々な面白い舞や歌を唄ふに於ては、奈何に久米仙人の門下でも、堅い／＼堅助でもいつかな直に魂を失ひ足場を外して沈没して終うであらう、それは兎に角こ奴奇妙にも人の弱點を覺つて居ると見えて、叔父さんお金を頂戴、指環を買つて頂戴と吐しよる、すると叔父さんウン宜ち／＼、やるよ買つてやるよ好きな物を、之はけしからぬ昔時から猫に小判と云つて、お金や指環なんか呉れたつて餘り重寶しないと云ふて居るに之の猫の兒計りはお金が一等好きよ、お金を多く呉れる叔父

さんが大好きよ、吝嗇ンぼの叔父さんなんか、嫌だから禿頭に火をつけてやるわ、驚いたねえ亂暴だねえ、奈何に禿頭に電氣がついてゐても火はつくまい、つかないのに無理につけやうとすると火傷をするよ危険だねえ、こんな状態だから須らく吝嗇ンぼなんか奈何に愛くるしい兒でも無暗矢鱈に買ふものぢやないよ、この猫の兒は只の猫の兒ぢやないよ、甘い鼠と見たら、何處までも追つ駈け廻つて鋭い爪をかける猫の兒さ、こんな奴に五分間で要領を得る應接をするのは如何なる方法に因つるかど云ふに、こ奴中々自惚の強い奴だから、お優しくゐらつしやるとか、美人でおはすとか



乃至は上品であるとか云つて煽動するにしかずだ、この呼吸を忘れなければ其應接は上々吉である。

二四、法界家

白雪に見離されたる捨小舟、頼りとするはお客のみ、とは法界家先生のことである、實に頼りない商賣であるが案外法界家先生、暢氣なものだ、したい三昧、はつたり四昧に、浮世を茶に過ごし、ぶらりくらしで何の目的なしに一生涯を送る、人間と獸との間者、明日食はずとも今日山海の珍味を慾する腦味噌の腐つた奴さ、末の百より今一つは蓋し法界家先生の

格言ならん、それも其の筈、他人の遊興中へ飛入と計かりに押入り、頼みもしないに下手な藝を押賣りする、づう／＼しさ、お負けに花でも呉れなければぶつても叩いても、奈何な動きこのない素太い奴、こうなるとお客の方でも餘り客齋にするもあの奴彼の奴の手前もあれば先づ懷中物を痛めなければ男か立たない様な氣になる、其弱點を捉へてゐる法界家の奴、此所らが例の、ぶつたくり主義を發揮すべき所であると思つてゐるのか、何んだか知らないが、盛んにお客やあの奴彼の奴を煽動して、御機嫌をとる巧妙さは流石にならず者の伶俐と馬鹿の合體者だけある、こ奴瞞着主義だ



のぶつたくり主義だのを研究しやがつて肝心の藝を磨くことを忘れ、只酒  
 只だ色に現をぬかす憐れさ、同情に價するではないか、兎角かゝる奴に接  
 した場合は理窟では通らない、只だ彼に對するは現在の快樂てふ一字ある  
 のみだ、故に彼を快感ならしむるは彼の墮落に相當すべき談話より始まら  
 なければならぬ。

二五、博士

文明の今日に於ては博士も數限りなく増加し、其の種類も亦頗る増へて  
 來た、殊に今日では、猫の博士も、蛾の博士も、蚤の博士も、虱の博士も

出來ないものでもない、この分ではお茶屋博士も、廓博士も、出來ないこ  
 は斷言し難い、若しこんな博士が出來たとすれば、博士の價値も思ひやら  
 れる、又自稱博士と云つて自ら博士に任じ、天拘鼻を振り廻す滑稽な先生  
 もある、兎角世の中が複雑になるに従ひ、總てのことが分業になるので、  
 自稱博士が殖へるゝ恰も雨の後の筈のやうに彼所にも何處にも、ノソ  
 〱鼻を出しよる、こ奴の云ひ草が面白い、我輩は此度猫の尻尾を研究し  
 た其猫の尻尾と云ふ奴は感情の集中してゐる所であることを研究したのだ  
 如何となれば其怒りを生じた時は其尾を左右に振る、之が即ち感情の集中



してゐる確證だ』驚ひたねえ、猫が怒れば尻尾を左右に振る位ひなことは餘程の薄馬鹿でも知らない者はないよ、そんな理窟を云ふなら犬は猫と反對に嬉ひを催した場合に尻尾を左右に振るから感情の散布とでも云ふのかわら、如何に自稱博士にしても餘りに滑稽過ぎた理窟ではないか、扱餘談は置き博士と云ふ人は學理の蘊奥を究め、一方に於て學理の發見に力め他の一方に於ては社會に之を發表する先生であるから須らく精神上の慾望に生きる人でなければならぬ、さうして一つの學問に専心努力して居る中で、精神作用が瀰波になるのは勢の免れない處である、従つて眞面目で

保守的で社會の事情に暗いのか一般である、かゝる人と應接を爲すには、先方の地位を認め、尊稱でも先生と云ふ様にし總てが謙遜に出なければならぬのと眞面目でなくてはならない。

三六、官吏

人は眼かけによらぬものと云ふが全くだ、官吏のやうな眞面目な正理の人が、随分人の眼を盗んで曖昧なことをやらかしてゐる、さうして其傾向が目を追ふて増加するは實に遺憾な次第である、甚だしきは山田憲の如く高等官てふ名譽の地位にありながら、感情の爲めか私慾の爲めか、奸商の



鈴木を一寸さざみ二寸さざみと計かりに首も手も足も切り棄て、づう體だ  
けを信濃川へどぶんと投げ込む猛烈さは實に驚いたもんだ、さうして虫も  
殺さぬ面で平日の様に御出勤なさるとは其素太いのも限りがある、こんな  
例外を以て官吏諸君を批標するのはお氣の毒であるが近頃新聞紙上などで  
官吏の名譽あるお方が非社會行爲をやらかしたことが掲載されてゐる様だ  
こんなことでは官吏諸君の本分が濟むまい、蓋し官吏は統治機關として國  
家の事務を分擔する名譽あり、地位ある人であるから比較的勤勉な正直な  
人である、かゝる人と短時間の應接を爲すには、須らく、品性を重じ公明

正大に出でなければ、到底其目的は達し得られない。

二七、軍人

軍人界に物質主義が流布すると、規律を紊し、兵を弱くする原因である  
と云ふが、今日の様に戦争からして、機械の戦争となり、總てのことが物  
質に支配されないものがない様になつては、軍人と雖も、今日の物質文明  
の半面を現す快樂てふことが、各人の頭を支配する状態であるから、随分  
此の慾望の爲めに墮落し、又は社會に害毒を流布してゐる者も尠くない、  
甚だしきにあつては名譽ある職權を亂用して、非社會的行爲を爲し、身



分に不相當の贅澤を極め、虚榮心の高い精神の腐つた細君の御機嫌伺ひを爲し前途有望なる一身を犠牲にする者さへある、こんな状態で社會が進んだなら、大日本國の強國に影況はありやしないか、要するに軍人は規律を以て生命とも云ふべきものであるから、物質主義の流布は軍人にとつて頗る害毒である、さうして我帝國の如きは規律の正しきことを以て、誇りとしてゐる、従つて軍人は規律的の生活を爲し、精神上の快樂を以て満足し、而かも何日でも、活潑な生活を持続してゐるので、各人の性質も大方此の習慣に支配されてゐる、故にかゝる人と應接するに於ては短時間にも充

分に其目的を達することが出来ることは疑れない、さうしてかゝる人と應接を爲さんとするには淡泊な態度で明瞭な言語を用ひ活發に接しなければならぬのである。

二八、待合のお内儀

待合のお内儀は藝妓の古物や料理屋の仲居連だから、山にも海にも千年と云ふ、せち辛い男優りの、アバズレ女の集合と云つても宜からう、こ奴狐と親類でもあるのか人を欺すことに妙を得てゐる、さうしてこ奴の欺し方は狐のやうに尻尾で魅むのではない、七つ八つからイロハを習ひハの字



忘れてイロばかりの理法で鍛錬あげられた杵柄、得意の口頭辯論で魅むのだから、二本棒は申すに及ず、堅い／＼客齋ンば先生でも、とても／＼勝訴の見込はない、早速賠償金で示談にとりかゝる、若し其賠償金が支拂れないとすると、さあ大變々々、かうなると前の様な甘い口頭辯論でない、にがい本物の口頭辯論が始つてくる、其雄辯なこと、皮肉なこと、欺罔的なこと、強行なこと、實に驚くべしだ、美しく咲く花が咲く、茨の樹にも、恐ろしい刺がある世の中とは云ひながら、餘りに勘定高過ぎやしなやか、金さる爲めには時も惜まず、勞も厭はず、犠牲になつて働くが、いざ人情問題

となると、空を嘯ぶいて腮を撫でると云ふ奴だ、又氣に向ひたときは案外親切にしよるが、お氣に障ることでも云はうものなら、ボン／＼と何の容赦もなくお眼玉を呉れる状態である、かゝる者に接して短時間で要領を得んとするには、先づ先方のお氣に障らない様に煽動することが、肝要である、何分彼等は常に自由な我が儘な生活を持続してゐるのでおてんばが此の上もなく増長してゐる、故に不活発な要領の得ない者と應接するのを潔しとしないので先方をして不愉快の情を惹起さしめることゝなる、茲に於てか先方を快感ならしめる爲め、淡泊に而かも活発な態度で應接する様に



注意してゐなければならぬ。

二九、女ボーイ

多くの酒客を相手にし常に其客を翻弄してゐる奴は誰れ彼れの容赦なく職業の如何を問はず、快樂主義に支配されてゐるのみならず、頗る勘定高きいお方でゐる、さうして何日も酒客の懷中物計り當てに心にもないお世辭を比べてゐるので、外交の巧妙なこと又驚くべしだ、而かも甘い男と見たら、其弱點に向つて突進するので、デレスケ先生遂に懷中物の自由處分の權限を許與する、其處分權を得た彼はそれを全部自己の所得にする、其の

云ひ草が面白い、ネエ貴郎、私の物は貴郎の自由貴郎の物は私が自由だから之を頂戴して置くは、イ、でしよ、ネエ貴郎とやらかすので二本棒先生涎をだらりと出すので何日の間にやら懷中物は空けつとなつてしまふ、そのくせ二本棒の要求は見事、土俵投げを食はせる、さあこうなると二本棒先生、指を噛んで痛苦をするも、及ばぬ鯉の瀧上ぼり、狐に魅まれたやうな面して、眼ばかり白黒させる様子は馬鹿とも阿呆とも格恰の附かぬ醜男だ、こんな手管で甘い男は翻弄されるが、却説世の中はこんな馬鹿計りではない、随分お伶俐様が多いから彼奴等に翻弄されて、無暗矢鱈に懷中物



の自由處分を許さない、人によると一錢の釣銭でも天下の通貨とばつかりに持つて歸る、かうなつちや、如何に天下無敵の外交家でも如何んとも致し様はあるまい、然るにこ奴中々素太い奴だから、さう逃がして斗りぬちや仕事にならないと見えて時に因ると強制贈與を迫ると云ふ有様だ、かゝる勘定高い奴に交際の必要がある場合には先づ彼等の最大慾望とする物質慾を満足させる爲め幾分かのオマジナイをやる、若しマジナイをやる必要を認めない場合でも彼奴をして快感ならしめる爲め、彼の嗜好に向つて突進する様にしたければならない。

三〇、女髮結をんなかみゆひ

女髮結が一般におてんばであつて嬢ア天下であることは争はれない事實である、まして今日のやうに社會が物質主義に傾ひて、各人が生活難を叫ぶ状態となつては、獨立して生活の途を講ずる、女髮結の如きは夫に絶對服従をすることが出来なくなる、況んや職業が職業であるから、自然おてんばに導かれるのである、こんな状態で、大方の女髮結は墮落してしまふさうして墮落した彼が嫁ぐとしても、嬢ア天下で通る所でなければ、到底辛抱が出来ない、よし辛抱するとしても、常に姑と衝突したり、夫とどた



んばたんをやらかさなければ納りがつかない醜態だ、兎角すると男女同権  
 を持出し、夫に説法をする、曰く『お前さん克く聞くんですよ、昔時と異  
 ひ今日は物質の世の中ですから、男女の差別なく多く金を儲ける者が、權  
 利があるのでですよ、お前さんの様に私の働きの半分しか出来ない人が夫だ  
 の亭主だのと威張る奴があるものですか、お前さんが夫だの亭主だのと云  
 つて尊敬されたくば先づお前さんが今の十倍程の働きをして、私を奥様ら  
 しく取扱かつて、初めて夫權だの、御亭主様だのと云はれる様になるので  
 すよ、お前さんの様に私が働かなければ乾燥てしまはなければならぬ、

意氣地のない者が理窟なんか云ふとは、餘りに虫がよすぎる話です、意氣  
 地ですよ、全體お前さんの様な意氣地なしの夫を持つて居るのは女の恥ぢ  
 ですよ、本来なれば私なんか立派な夫を持つべき筈なんだか、どうしたは  
 づみかお前さんの様な低能の者と夫婦になる様になつたのですよ、私は之  
 が悪縁と斷念めて居るものゝ理窟なんか云はれると、眞から嫌になつてし  
 まうわ、私は何日も出やう／＼と思つて居るものゝ私が出て行けばお前さ  
 んが乾燥になつて困るだらうと思へば、一日でも夫婦になつた人情として  
 出ることも出来ないのですよ、それにお前さんの様に身の程を知らず、づ



う／＼しくも理窟なんか列べるとは餘りに素太過ぎますよ、以後慎みなさい』と口角泡を飛ばせて説法するスタイルは恰も新しい女の出来そこないである、こんな奴に應對する場合には須らく煽動的たるべしだ、併し多くの人に接し多くの人を相手にしてゐるだけ、世事には通じてゐる、従つて外交的の手腕が養成されてゐるから判断りは早いが何に分我が儘に仕立てられてゐるので感情を害すると、是非の如何を問はず反對する女である。

三一、看護婦

世の中が進歩するに伴ひ、各人の思想が著しく發達し慾望の種類は益々増加して來た、殊に虚榮心の如きは上下の區別なく嵩まつて來たので随分虚榮心の爲めに墮落して一生涯を犠牲にする者も尠なくない、就中看護婦の如きは其最も甚だしいものである、看護婦にして虚榮心の爲めに店前で萬引を爲したり、窃盜を爲して刑に處せられる奴も中々尠くない、彼奴等は自惚の強い、身の程を知らない、馬鹿と惻憐との間者である、さうして彼奴等の墮落の原因を調べて見るに素質がおてんばの者もあるが、概して境遇が彼等をしておてんばならしめたのである、又虚榮心の高くなつたのも、之たゞ境遇に支配されたのである、彼等中間のおのろけ話は又面白く



も笑止くもある『川木さん嬉んで頂戴よ、私しねえ上野公園で遭つたのよ  
 随分久しぶりで遭つたのだから何にから先に話していゝか知れなかつたわ  
 兩人で漠然として立つてゐたのよ、するとあの方が君嬉んで呉れ給へ、漸  
 く目的の學校へ入學つたから、夫婦で牛活の出来る時期も最早遠くはない  
 と仰つたの、私し嬉しくて思はず握手したのよ』と得意になつて話して  
 ゐる、これだけ聞いた所では至極立派な様だが、其原因を聽いて見ると意  
 外なものには驚くべしだ、其兩人中介したものは人間でもなければ、神様で  
 もない、上野公園のロハ臺ださうな、おまけに男の素性を調べて見ると、

女たらしの不良青年ではないか、學生と云ふのは二三年前のことである、  
 其の當時には一二月は籍が學校にあつたこともあるそうだが今では動も  
 すると裁判所や監獄に籍を置くこともなきにしも非らずと來ては、呆れて  
 口がきけない、夫れに肝心の本尊様は角帽が案外お氣に適ひ將來學士の奥  
 様を夢みつゝ墮落の淵に倫落されつゝあるは實に御氣の毒とも可愛相とも  
 云ひ様がない、これも皆虚榮心の爲めに墮落に導かれて終うのである、以  
 上説明した所は例外ではあるが、一般に看護婦は虚榮心が高くおてんば  
 になつて居ることは事實に調しても明かなことである、故にかゝる女と應



接の必要がある場合には可成彼の虚榮心を利用する様にしなければならぬ、其の弱點に向つて突進するときには如何なる要件と雖も彼の機先を制し彼をして其要件を認めさせることが出来るのである、況んや短時間の應接に於て要領を得んとすれば常に之の心懸げがなければならぬ。

三二、不良青年

生存競争が激甚になつて各人が生活難を叫ぶ今日に於て、働き盛りの青年がのらりくらりで生活して居る奴がある、其くせ國元から送金がある理でもなし、贅澤にしたい三昧に浮世を過して居る野郎がある、こ奴こそ警

察で眼を白黒させ搜索されてゐる不良青年である、彼奴の本職とする所は少女の弱點を捉へて誘拐し、節操を蹂躪して金銭を巻き上げ、物品を強奪せんとするのである、さうして誘拐の方法が至極巧妙を得て居るので無垢の少女は遂に其の網にかゝるのである、其方法は少女の好奇心と弱點とを捉へて突進するのである、例へば女學生に對する場合は、其女學生の虚榮心と好奇心を満足させる爲めに大學生に身を飾り、乾燥びかけた脳味噌から嘘まじりの外國語や漢語などを並べて少女の歡心を買つて盛んに秋波を送るので虚榮心と好奇心に強い少女は遂に其手管にかゝつて終うのである



次に商店の娘や銀杏返しの娘に對しては、先づ服装を紳士若くは良家の  
 子息に装ひ、さうして彼等の物質慾を向上さすべく力めるのである、何  
 れにするも彼奴等は少女の弱點を克く會得して居るので少女たる者、又は  
 少女を有する父兄は克く此の點に注意をして居なければ、思はぬ不幸に陥  
 る場合がある、要するにかゝる奴に對した場合は彼奴をして、機先を制す  
 る様にしなければならぬ、まして、短時間の應接で要領を得んとするに  
 於ては尙更之の點が肝要である。

三三、下宿屋のお内儀

客商賣をしてゐる者は、其職業の如何を問はず、唯れ彼を論せず、一  
 般に物質慾が發達して居る、下宿屋のお内儀も矢張客を相手にする商賣だ  
 けに、夫れ相當に物質慾が養成されて居る、併し下宿屋と云ふ商賣は收入  
 の細い商賣だから、主唱者たるお内儀が物質慾に長じて居ないと、到底之  
 を繼續することが出来ないのが常である、故に商賣上人一倍と物質慾が  
 發達してゐることが必要である、こんな理由に基いてか随分下宿屋のお内  
 儀で無垢の田舎學生を捉へて暴利を貪らんとする奴がある、さうして東京  
 の下宿屋の習慣として下宿料以外の物を誂へるときは二割以上の頭をはね



る様になつて居る、甚だしきに至つては四割五割と云ふ暴利方をやる處がある、何ごともこんな有様であるから、客に對する場合などは勘定高いもんだ、殊に客の方からお内儀の歡心を買ふ奴がある、こんな奴から巻き上げることの巧妙さは、待合のお内儀に優らずと雖も劣らない、即ち二本棒の懷中物を覗うことは中々の腕きゝである、かゝる外交手腕に長じた者と短時間で要領を得る應接を爲さんとするのは如何なる方法に因るや、先づオマジナイの必要がある場合には之を爲すことが主要な事項である、若し之を必要としないとしても彼の物慾に反しない様に注意することは彼を馭

す上に於て最も必要である。

三四、天狗

世の中には色々な天狗があるが、其内面に立入つて、考查して見ると實に驚くべしだ、平民主義を叫ぶ奴の家庭には、案外にも華族めいた處がある、自然主義を振り廻す奴は、意外にも不自然な行爲を爲してゐる他人のことで風俗を紊して居るとか公秩に反してはならないとか云ふ、當局者に案外風俗に反した行爲が多い、社會の耳目である新聞記者が、却つて世間知らずの無常識者が多い、人情の機微を穿つと云ふ小説家に人情知らずの



世事に眞暗な輩が多い、新しい女と自稱する女が殊の外、古疵の多のには驚くべしだ、尙甚だしきに至つては無垢の兒童に對し、品性を重すべし、誠實なるべしと説く教育家が其兒童と通ずる如き、又子に對し遊女買ひをしてはならぬと怒る親爺が、のそく遊廓へ出かけて涎れを垂らす奴の多きに驚くべし、要するに天狗の内面には總てかゝる醜體が復在しないものは無い、實に天狗の價値たるや、淺薄にして價なきことを知る、天狗にして内面充實すれば敢へて天狗となるの必要を認めない、内容に缺くる所があればこそ社會が之を認めない、果して社會が之を認めるに於ては

敢へて天狗を極め込む必要はない、結局天狗は半熱者で病の種だ、こんな病者に對し短時間で要領を得る應接を爲すには、二つの方法がある、其一つは煽動的であつて、他の一つは彼奴の機先を制して天狗鼻をへし折るのである、其機先を制すると云ふのは、彼が天狗を振り廻さない中に彼を制して徹頭徹尾、天狗鼻を振り廻すことの出來ないやうにすることを云ふのである。

三五、惚け者

恥も人情もなく惚け散す者がある、元來この惚けと云ふものは男女の差



別なく自然に生ずるものである、さうして其惚けと云ふ奴は、餘りの嬉しさに堪へられず、つい我を充れて口に出るものであるが、夫れを口に出さない所に真正の戀があるのではなからうか、其の證據には幾程馬鹿でも自分の癖の惚けは餘り出さない、又戀は性慾のやうに劣等のもではない眞正なものであるから、さう大びらに自慢らしく人に語るべきものでないが馬鹿先生に至つては、この惚けを以て人生最大の名譽と心得、甚だしきに至つては、また出来もしない女の惚氣廣告に東奔西走して居る奴さへある結局惚れても居ない女が自分に口をきいたので早合點して惚れて居る様に

信じ夫れを吹聴する馬鹿野郎も随分尠くない、この點から考へて見ると馬鹿でも相應の虚榮心があるらしい、つまり惚けは快樂を二重に現すものと云ふが馬鹿の惚けと來たら二重どころが五重にも六重にも吹聴して無暗矢鱈に嬉ひ散らして居る、さうして惚ける奴は必ず自惚の強い奴だ、自惚が強いから振れても嫌れてもそんなことは無頓着、たまに一言ぐらい甘い詞がかゝると自分に對し熱烈な戀をして居るやうな心持になつて増長し、夫を惚けの材料にするのだからたまらない、かゝる奴を相手にするには先づ彼の虚榮を利用して煽動てる様にせなければならぬ、何となれば彼奴



は其惚けを云ふのが最大の快樂であるから其快樂を利用する様にすれば必ず其目的は達しられる。

三六、おさん

おさんどん、お前さんは随分克く食べますね、ちつと奥様が居なくなると、早速オハチを抱へたり、お芋を失禮したりするではないか、さうして奥様が小事を云ふと、其辯解が實に面白い、奥様私が居なかつたら、玉猫が来てお芋を盗んで食つたのですよ、私なんか尠しも知らないんですよと云ひながら玉猫を何の容赦も荒波のぶん／＼と、罪も罰もない猫をぶつ

お氣の毒なのは玉猫だ、おさんどんお前が食つたとも私食べないのですんとも、何とも云へないので、ギア／＼悲く計りだ、奥様はそんなことは知らないから、玉ちゃんお前お芋を食べたのですか、不可ませんねえと又してもお眼玉一つぼんとやられる、こんな有様でおさんどん君とき／＼やらかす、可愛相なのは玉猫君だ、おさんどんが奥様の眼を盗み、むしや／＼やる度ごとに奥様からお眼玉がある、さうすると又しても鐵の棒のやうな太い腕で、如何にもにくさうに頭からぶん／＼とやらかしよる、これは單に一例だが總てが奥様の眼を盗んで色々な藝をやりよる、だから自然に表



面と裏面との關係が生じてくる、さうして家庭的の趣味がなく孤獨の生活を持續してゐるので、遂に理想は去り、目的を失ひ、目前の快樂のみに満足し、蔭あるごとに物質慾を充たさんとする哀れな状態に陥るのが常である、かゝる女に對し短時間で應接の目的を達せんとすれば、彼の最大慾望とする物質慾の満足に力める様にしなければならぬ、何を云ふても現在の快樂以外には何等の理想も目的もない、可憐な奴であるから、之の快樂を利用するやうに彼に對しなければ到底彼を馭し得ることは出来ない。

三七、俳優

近頃俳優が勃興して、猫でも杓子でも馬の足でも、社會にもてはやされる様になつたので、名家の子女が藝術だの技術だのと云つて其團に投ずる者が多くなつた、併かし其内面に立入つて調べて見ると又驚くべしだ、まだ日本では昔時の習慣が打破されなくて、随分醜い行爲や墮落が充滿して居る、それも其の筈其俳優を志望せんとする人が、眞に藝術の妙義を研究しやうとして、入團するのではない、只だ俳優になれば面白からう、我が儘が出来らうであらうなどと云ふ、醜くない考から入團するのだから、其習慣に打勝つことは到底出来ない、殊に女優の如きは、其墮落が最も甚だ



しいやうだ、さうして一方観覽者にあつても、眞に藝術を觀るのでなく、彼等の美しい所や、へんな眼附や、愛嬌たつぷりと云ふ様な所に、案外興味を持つて居るのだから終末にをへない、加之こんなつまらない観覽者が多いのだから、女優にあつても一生懸命に藝術の妙味を究めるよりは、へんな眼附をしたり、愛嬌たつぷりと云ふ點に進んだ方が成功するから、肝心の藝術は益々拙くなる、之に反し墮落は愈々増長すると云ふ状態である、故に男優女優、差別なく観覽者の心を引かんとして全力を注いで居るので自然に神経が鋭敏になり、墮落が増してくるのである、さうして動も

すると人に上下の區別をなしたり、感情に支配されて奮怒したりする場合は尠ない、斯くの如く神経が過敏で、而かも快樂主義に支配されて居るので、應接ぶりが拙いと容易に要件を入れない、茲に於てか俳優に對する應接は、彼の快樂を利用して彼の感情を奮起せしめることに力めなければならぬ。

三八、醜男

醜男が美人を妻として其間に水も漏さぬ愛情に満ちてゐるのは、いかにも良人の器量を上げて良人はいよく立派に男らしく、妻又貞操を表はし



て其妻いよく女らしく奥床しく、家風家庭の内容も亦美望の極である、故に人をして惱殺するに足る所がある、嘗つて萬朝報の金言募集に、眞の男は醜くしと云ふのが一等當選者であつた、如何にも醜男こそ眞の男である、併し之の格言は妻に對し、家庭の圓滿に對する詞であつて、外部に對しての詞でない、醜男こそは神經質の弱々しき美男と異なつて、妻に對する愛情も濃厚であり、多情に非らざるが故浮氣心も起らず、而かも大に剛膽な點があるから小言も餘り並べないので、妻又貞操を重んじ、良人に服従する以所である、茲に於てか家風家庭の内容も充實し、圓滿な家庭を作

ることが出来るると云ふのである、内部の關係果して然りとすれば外部亦然るやと云ふに、外部の關係稍々可なりと云へど、神經過敏の美男の様には外交術に長せず、とき／＼人に欺かれ、好機を失する場合などは随分尠くない、之眞の男として免るることの出来ない缺點である、さうして醜男は概して吝嗇んぼで勘定高い所がある、其のくせ判断が遅くて外交が拙いので、中々短時間にて要領を得ることは困難であるが、公明正大に判断し易く説さつけたなら、其目的を達することが出来るが何に分情に支配されない人間であるから、空想なことは可成避けなければ其應接は失敗する。



三九、嚴格な人

嚴格な人と應接をするのは甚だ困難である、動もすると君子は危険に近寄すだのと云つて中々心を許して應對しない、さうして應接する者が禮儀にはづれたことでもしよものならそれこそぶん／＼と腹を立てるし、又小言などを列べたりして、容易に要件を入れない、殊に女子の如きは相手を輕視して要件を入れる所ではない理窟を云ひ出したり、陰口を云つたりする併し大體に於て嚴格な人は公明正大の者が多いから、虚言を云はなければ信賴させることは出来る人である、故にかゝる人に應接する場合には

必ず身體を清潔にし、品性を重じ、禮儀を正しくし、活潑な状態で誠實なことを云ふ様にしなければならない、さうしてこ奴、中々君子然として精には動かされない、おまけに變心と來た日には、それこそ手にも足にもかゝつたものでない、煽動すれば馬鹿にしやがると怒るし、罵倒するとかん／＼吐鳴る、かゝる奴に對しては五分間應接者も聊か凹みの氣味がする、こんな奴にかゝつた時は餘談を省き公明正大に進むより外に途はない。

四〇、後家

先づ後家君の素性を考査して見るに、夫の生きて御座る間は、天晴無類



の貞女とばかりで、いざ御亭主が息を引取つたとすれば悲難の結果、亭主と共に同じ穴の中へ飛び込んで終ひたいなどと云つて居るが、さていよいよとなつて見れば、周章もせず、狼狽もせず、案外に落付拂つて御座る、どうせ切つても又生える髪の毛だが急に惜しくなつて切ることさへも躊躇してゐる有様、それかと云つて世間に申譯が立たないので、切つても差支ない程度の處で、ぶつり鋏を入れて置いて、いざ御入用と云ふときには一日も早く用に立てられる準備をしてゐる、さうして表向に再縁でもするのなら、可愛らしい處もあるが、何んど斗らん口には操を立にし、一生涯後

家で通すなど、喚き立てながら、その舌の根が乾かない中に、驚くべし、はや厚化粧が始まる、果して白粉が後家の顔につくと『白粉をつけて汚れる後家の顔と、自然に人の口の端に上られるのが常であるとは、世の中の貞女も思ひやられる併し、一概に後家を罵倒する譯でもないが、兎角女と云ふ奴は忍耐に缺けて居て『女心と秋の空』と云はれるだけ心變りの早いこと、活動寫眞のフィルムみたやうなもんだ、どうせ後家を守ると云ふのは永くて半年、短かくて一ヶ月のことだ、一生涯の後家と云ふのは表門だけのことで裏門には男妾の出入口の立派のがある、後家さん中々隅に



置けない表門はかつかり飾つて裏門の方には、ドブや掃溜の様な腐つたものばかり集めて、嬉んで居るとは人は見かけに因らぬものだよ、かゝる女に對し短時間の應接で要領を得んとすれば彼の墮落を利用するやうにせなければならぬ、即ち彼は名譽より快樂と云ふことが最大の慾望だから其の快樂を惹起さしめるやうに力めなければならぬ、即ち精神の腐つた奴には腐つた物を持つてゆかなければ馬が合はない、故に人の墮落してゐるやうな談から進めて行くやうにせなければならぬ。

四一、男妾

近頃は随分御婦人方が發展なさる世の中だ、それ芝居だ、それ花見だ、何等かの名稱をつけて、名家の貴婦人達が、俳優を買つて遊んだり、自動車（しやうしゃ）の運轉手君と手を取つて死出の旅事の道づれや、悦（うれ）しいことや、悲（かな）しいことや、色々（いろく）な藝（げい）をやらかしよる、こ奴（いつ）の相手方（あひて）こそ男妾（をとこめかけ）でも云はうか、そも／＼男妾（をとこめかけ）たるや、妻（つま）を娶（めと）るにあらず、妻（つま）の家（いへ）に入るものにあらず、女の財産（ぜんだん）あるを目的（あて）にして、女（をんな）に養（やしな）はれんとする奴（やつ）さ、苟（いや）しくも堂々（どうどう）たる一個（ひと）の男子（だんし）として、かゝる無恥（むじ）の徒（と）あるべき筈（はず）はないが、何（なん）ぞ圖（はか）らん今日の世間（よこんにち）、かくの如（ごと）き堂々（どうどう）たる一個（ひと）の男子（だんし）あるのみならず、實（じつ）は案外（あんぐわい）



に多くあるに於ては概歎せざるを得ない、心の腐つた男、妾何日ものらりくらしで女の御機嫌取りのみを研究し、浮世を茶にして生涯を送らんとする哀れな男、ときによると腰巻のお小事をも頂戴せなければならぬ場合がある、奈何に女權の盛んな世の中とは云へ、嬢アに對して一も二も御最もさまと、氣暗矢鱈に禿頭を下げなければならぬ商賣は實に心細いぢやないかと友朋輩から云はれると、得意になつて何にさ細工は粘々仕上げを御覽じ、立派に彼奴の財産を巻き上げて見せるよ、さうなれば成金さんだよ、何もさうアクセクと働くに及ばんよ、人生僅か五十年だ、面白笑止く

暮せば好いのだと、泥棒根性を出して嬉こんで居る、彼奴の腐つた心中、只だ呆然たるばかりだ、かゝる精神の腐つた奴に對する場合は、眞面目なことは一切禁物に只だ面白く、彼奴の墮落を利用する様に口を聴くことが肝要である、さうして彼が快感を惹起したときに要件を持ち出すのである。

四二、すけべ

いや日本と云ふ國は昔時から女でなければ、夜も曉けぬと云ふ國だから始末に終へない、男たる者が女を見たら精神恍惚夢に夢見て居るやうな氣



持になつて、身體は宇宙にフワ／＼して、起つて居るのか座つて居るのか更に解らない、ましてすけば野郎と来た日には、垂涎腮を潤すも知らず、腑抜に間拔が腰を抜したやうになつて目も眩まんばかりの醜體さ、おまけに肩でも一つふたれうものなら、それこそ有頂天外に魂は飛び、無暗矢鱈に懷中物を振り廻し、家庭には金の茶釜が百もありさうな面をして贅六氣質を現はして居るものゝ、家庭へ歸れば嬾アが鍋ごとくじつびきで働いて居る有様や、明日のお米の心配や嬾アに胸倉をとられることなどは何日の間にやら飛び去つてお金のない國へ行つて見たい様な鷹揚な面付きをして

だらり／＼と垂れる涎は恰も牛涎に等しく、何日切れるやら更に判断ない状態は腐抜か間拔か判断のつかぬ奴である、そのくせ男に向つては中々理窟を云ふ野郎さ、こんな野郎に對し短時間の應接で要領を得んとすれば先づ彼奴の弱點とする、すけばを利用する様にせなければならぬ、然らずんば理窟を列べて容易に要求を入れない奴である、然るに女の要求であれば是非の差別なく其要求を入れると云ふ二本棒であるから之の弱點に向つて進むやうにせなければならぬのである。

四三、守兒



守兒と来た日には襟垢でびか／＼光る雙子織の着物を纏ふて、あはれにも唐繻子を羨む毛繻子の丸帯を占め、それも今は處々に穴を穿がち虱が巢を構へる有様なるに、顔のみは三錢の白粉をべたく、其のくせ頸の處はあかの集会所と来てゐる、色は一割も二割も黒くて眞黒助、生際は何處が境か判別し兼ねる、額には立派な腫物の痕跡があつて夜着の袖口に優る厚い唇、目は牛の眼玉の大きさ、いかれる獅子ツ鼻、胴より生えた猪首の太さ口は百圓紙幣が横に入らうと云ふ墓口、齒は象の牙と間違へられる程の出齒、頭の縮れ毛に鬢附油をこきつけ、腕の太さは一尺八寸、横にころぶ

が早いか縦に歩むが早いか一番競争しなければ判別ない程、デブ／＼に太つた、兒守先生歳は何歳と訪ねたら、今年とつて十五歳、とき／＼鼻は出してゐるものゝ友朋輩と遭ふ度ごとに男の選び話、身の程を知らぬもあまりとしたこと『私しねえ家の若様かお隣の下宿に居られる大學生の方が一等好きよ』『私はねえお隣の呉服屋さんの番頭さんが好きよ』などとつてもつかぬ選らび方、こんな談話の眞最中、兒童でも悲くものなら、頭でゴツ／＼何の容赦もなくやらかしよる、そのくせ家へ歸ればお兒さんは大層お優しくゐらつしつたなど、嘘八百を列べて奥様の御機嫌取りをやり



よる、こんな奴でも虚榮心は高いと見えて、何時暇さへあれば鏡の前へ座つて、番臺面へ化粧をやりよる、又人から之の子は好い子だのお世辭でも云はれうものなら、天に上つた様な氣になり、得意なこと實に思ひやられる、反對におかめだの番臺だのと云はうものなら、それこそ番臺面も一割段平らたく恰も正氣さんに胃病の薬を服用たやうな面をして、怒るまいか怒るまいか、何にもかも投げよる、こんな低能先生に對した場合は煽動的に馭すに然かずだ、又僅かでもオマシナイに因つて馭することの出来る奴である。

四四、女學生

近來女學生の思想が我教育の目的に相反しては置りやしまいが、我教育の目的は虚榮心を殖けるのではない、又墮落を教へるのでもない、良妻賢母たらしめんとするのだ、然るに多くの女學生は、そんなことは無頓着な學校でも卒業して居なければ、鼻を高くして嫁入ることが出来ないといふ、殘薄な考から入學するのだから始末に終へない甚だしきに至つては猫でも杓子でも、女學校さへ卒業すれば良家へ嫁ぐことが出来るると云ふ虚榮心から入學するのであるから女學校卒業を一種の嫁入道具のやうに心得



て居るものさへある、こんな不心得で入學した女は、遂に其虚榮の爲めに  
 一生涯を犠牲にするのである、この種の女が墮落する原因は多く左の順序  
 である『曰く何々さんは良家の御子息だつてねえだから、私し彼の方なれ  
 ば大丈夫だと思ふてよ、第一古郷が良くなければ駄目よ、古郷さへ良けれ  
 ば學校なんかどうでも良いのよなど、云つて居るので遂に其男に翻弄され  
 て終う、固より無垢の女を翻弄しやうとする男だから、古郷に金の茶釜が  
 幾つでもある様なことは無論云ふ、それを虚榮心の強い女は眞實にとるか  
 ら始末に終へない早速彼奴の悪辣な手管にかゝつて墮落する、さあ墮落し

て終うと男の方で御免と計かりに高飛びをするかうなつてくると女の方で  
 は悔悟するかと思ひの外、自暴自棄になりよつて、又も引かゝるそれが度  
 重なると、生れもつかぬおてんばとなつて親なかせをやりよる、以上は單  
 に一例だが方針を過つて學問をすると却つてせざりし以上の弊害が生じて  
 くるから、克くこのことは注意して居なければ當初豫期しない痛苦に陥る  
 ことゝなる、要するに目下の女學生が物質に支配され、而かも虚榮心の強  
 いこと驚くべしだ、さうして好奇心も強く、情に支配され易いことは争へ  
 ない事實である、故に之の點に留意して應接するときは容易に其目的を達  
 應接の仕方



し得られるのである。

四五、朝寢の男

人には人癖と云つて、色々な癖のあるもの殊に朝寢ぼうと云つて、朝九時になつても十時になつても、グウ〜と眠つて居る奴がある、又晝寢ぼうと云つて人が一生懸命に働いて居る白晝にグウ〜とやつて居る奴もある、尙又晩寢ぼうと云つて、日が西に傾くや否や早速寢る奴もある、何れにするも時分知らずの變つた奴さ、就中朝寢ぼうと来た日には、太陽が高くなつて人が晝飯を要求する時分になつても、平氣の平ちやんで涎をだら

く、沖へ出て居る、用事が出来て起しても石佛に説法するやうなもので何のきゝめもない、無暗矢鱈に起せば嘔鳴るか又は寢ぼけて、始末に終へない先生さ、果して起きたとしても、膨面をしながら、ブン〜しよる、こんな時に應接をしても到底其の要領を得ることは不可能である、まして交際の如き人類最高の善たるに於ては、かく不快の時期に其目的を達し得べきものではない、故に朝寢ぼうの者を訪問して應接を求めんとすれば、須らく午後午後に訪問する様にせなければならぬ實際に於ても爽々たる名士が朝寢ぼうであつて、午前中訪問しても中々應接しない、まよよく應接し



て呉れたとしても、八ツ當りにブン／＼怒りつけるとのことだ、こんな状態では五分間はさて置き一時間應接して居ても目的は達しられないから、かゝる人に對しては午前中の訪問は可成避けるやうにしなければ、五分間應接も何の効をなさない。

四六、大乳房の女

人間の構造は皆大同小異であるか之を研究して見ると頗る違つた點がある、殊に女子にとつて大切な乳房の如きに至つては千差萬別である、さうして其乳房の構造如何に因つて其人の性質にも著しい差違がある、先づ

其大きくやはらかな乳房の女に付て之を云へは、第一だらしがなくて氣のきかない判断の遅い女が多い、併し温和なことは温和であるが、きてんがきかないので臨機の處置をとる様なことは不可能である、ごちらかと云へばお人良しであつてお日出度い方であるが情に支配されない女だから、短時間の應接で要領を得ることは至極、難かしい、まして之の種の女で理窟家と來た日には、箸にも棒にもかゝつたもんでない、判断の遅いくせにくだらない理窟を比べるので始末に終へない、かゝる奴に對した場合には彼奴の機先を制し、彼女をして理窟を比べさせない様に力め、さうして彼奴



の判断の遅に所を助ける様にせなければならぬ、併しきてんのきかない女だから判断つて居ても中々諸否を明かにしない奴さ、兎角不得要領で、ごまかそうとする功妙な奴だから、餘程の缺點を捉へなければ中々其目的を達することが出来ない奴であるこの種の女で單にお出度い奴は馭し易い點がある、かゝる女に對しては、誠實な態度で判断易く説きつければ要領を得る女である。

四七、小乳房の女

兎角女は我が儘が増長してくると、感傷的なヒステリ的の女になり易い

ヒステリ的の女と来た日には、それこそ手にも足にもおへたものでない、優しくして居れば、何處までも附け込んで、無暗矢鱈なことをしよるし、強くかゝれば命がけで反抗して死ぬだの生きるだのと云つて、暴れ廻つて始末に終へない奴さ、かゝる女を調べて見ると乳房が小さくて堅い、甚だしい多血性の奴ばかりだ、偶々貧血性の女があるとしても、同じく乳房は小さいさうして、乳房の小さい女は、神經過敏な感傷的の人間が最も多い故にかゝる女に對しては先方の感情を奮起さすべく力めなければならぬのみならず、感傷的の女だから感情に支配されることが甚だしい、即ち熱



し易い醒め易い女だけあつて、感情を害した場合は是非の差別なく、ブン  
 々怒りつける女だから、感情を害したときは、奈何に、天下無敵の外交  
 手腕を有する人でも之を馭し得ることは出来ない、況んや五分間と云ふ短  
 時間の應接で要領を得んとするに於ては、到底不可能の業である、然るに  
 快感の情を惹起した場合には、利害得失を考慮せず、速かに要領を得る女  
 である、故にかゝる女に對しては煽動的に彼の感情を奮起せしめる様に力  
 めることが肝要な事項である。

四八、悲觀的の女

悲觀的の女と來ては實に驚くべしだ、嬉しい時にも泣き目出度時にも泣  
 き、右に泣き左に泣き、前に泣き後に泣き、行きて泣き歸つて泣き、死して  
 泣き生きて泣き、仰いで泣き俯して泣き、起きて泣き寝て泣き、夢に泣きう  
 つゝに泣き、花に泣き月に泣き、戀に泣き愛に泣き、詩に泣き歌に泣き、  
 星に泣き堇に泣き、晝に泣き夜に泣き、小説に泣き美術に泣き、芝居に泣  
 き舞に泣き、境遇に泣き社會に泣き、煩悶に泣き憂愁に泣き、酒に泣き餅  
 に泣き、怒つて泣き笑つて泣き、職業に泣き商賣に泣き、春に泣き夏に泣  
 き、秋に泣き冬に泣き、親に泣き子に泣き、成功して泣き失敗して泣き、



夫に泣き妹に泣き、その他あらゆる總ての事々物々に泣いて、人生一生涯を哀れに送る女がある、これが積り積つてくると一種の病的に變じ、もはや人生一期に笑ふこと、喜ぶことを知らざる不幸者となるのである、かゝる女は一割も二割も感情が鋭く、加之も案外小心な女であるから、ついで何にもかも氣にかゝつて心配を始める、それが重つてくると人生何ものも快感と云ふことはないかの様に思れて、悲しくなつてくるのである、故にかゝる女に對した場合は、成るべく淡泊に而かも活潑に應接をする様になければ、遂に彼の悲感中に陥つてしまはなければならぬから、簡單

に快感の中に彼を制する方法に因らなければ到底其目的は達し得られるものでない。

四九、交際家

吾々人間は他の動物と異なる所なく、第一に食を求め衣類を欲し、さうして住家を要求するのである、若し之等に不足を感じないときは、相當の禮節を守つて他と交際するのが最高の慾望である、そも／＼交際は人類最高の善であるから、或者の如きは交際を以て殆ど名譽の如く心得、自己の本分を忘れ、用もないのに四方八方に飛び廻つて慢りに交際の廣さを誇つ



て居る、さうして常に電話帳の抜書を懐中にして蒼蠅く交換局を煩して絶えず照會もせられない宴會などに押しかけて、盛んに名刺を振り蒔き、交際上手とばかりにちよつと顔さへ見れば、忽ち親類縁者の如くに附き纏うて離れぬ工合、恰も馬鹿が嬢アの尻附に等しきさま、つまり穿き違ひの文明思想に中毒せる一種の病者である、それかと云ふて悪人でもなし、寧ろ現代思想にとらはれた好人物である、かゝる先生に對しては、自己から交際を求めなくても勝手に向ふさんからお出かけなさる、又難かしい交際秘訣を用ひなくとも、向ふさんの方で、ちやんと膳立をしてくれる、併し

先方は交際家と自任して御座る方だから、交際に付ては巧妙な點もあらう茲に於てか先方の交際術に巻き込まれない様に心懸けて居ることが肝要である、若し先方の外交術に巻き込まれて終うときは、自己の要求は其効を奏しなくなる。

五〇、おてんば

文明の今日にあつては鼻紙のやうな汚ない物でも、廢物利用として又社會の用をなす世の中に、おてんば程困つたものはない、吾々の眼から見ると廢物利用にもならないやうだ、年が年中男と見たら、キヤツ／＼と羽ね



廻り、飛び廻り、朝から晩まで廻つてどたんばたんの大騒ぎをやらなければ、お機嫌が悪いと云ふ、哀れな奴さ、さうして男も云へない馬鹿口を口から出まかせに比べ立て得意面、これでも人間かと窃かに抓つて見るに痛味を感じるど見えて『痛い何をしよる』と怒りよるから彼でも人並に血だけは廻つて居るやうだ、こんなおてんばでも何にかの用になるかと云ふに、世の中は廣いもの大にあるとのことだ、因みに聞けば娼妓になれば一人前の働きが出来るかと云ふので人にも亦廢物利用があるものだと感じた、かゝる心の腐つた女に對し短時間の應接で要領を得ることが出来るか

と云ふに、彼等は理想はなく、只だ現在の快樂のみに満足し、我が儘が如何なく増長して居るので眞面目なことや、氣に向かないことでも云ふものなら、ブン〜お立腹なさるが、美人でゐらつしやるとか、姿勢美があつて上品だとか云へば、得意になつて、キャラ〜騒ぎたつて喜ぶ様は馬鹿とも阿呆とも格恰のいかぬ醜女である、こんな呼吸で彼奴を馭するときは賭易く馭することが出来るのである。

五一、屁理窟家

屁理窟と云へば、常に絶えず無用の詭辯を考へ、相手の不意を覘うて喜



び、世間の穴を探して面白がり、たとひ三度の飯を二度に減らすとも日に一度は人を困らせたり、凹ませねば、氣持が悪くて、夜も寝られないと云ふ男ださうして人の穴を探すに妙を得て居る奴で恰も著者の様な人間である、そのくせ理窟と云へば、社會に通用を禁じられた天保錢のやうな、疵だらけのものを、さも得意さうに振り廻すのみならず、人の感情を害するやうな理窟を云ふのだから、憎まれること請合だ、加之も憎まれる程、増長して猶更ら憎れ口を叩くのだから始末に終へない、そもく彼奴は人が大に嫌ふ屁理窟を以て天下の大議論の如く愚考して居るのだから、何事に

因らず、事々物々に入らざる理窟を列べるのが常である、若し人にして反抗するときは、是非の差別なく、其屁理窟を貫徹せずんば已まんと云ふ、負けざらいな奴である、かゝる人間に對して短時間の應接を以て要領を得んとするは最も困難な業であるが、詳細に彼の心理状態を考査して見るに彼には又弱點がある、即ち彼は非常なる高慢無禮の人間であるから、煽動的に突進するが又は機先を制して彼を降服せしむるかの方法に出ずること

は容易に其目的を達し得べきものである。

五二、酒好き



酒なくて何のおのれが櫻かな、とは酒飲みの眞理を克く現した詞である  
 全く酒飲みと来た日には酒がなければ、奈何に立派な月を見ても、奈何に  
 美しい花を眺むるも決して満足する人でない、何日も泥酔して泣いたり、  
 笑つたり、怒つたりしなければ満足しない頗る面倒な人間である、さうし  
 て其泣くと云ふのは酒を呑むと何事に因らず、悲しくなるので、人が面白  
 がつても、笑しがつても獨り悲しくなつて泣くと云ふ病的の人だ、又泥酔  
 の結果、無暗矢鱈に怒る者がある、こ奴は事々物々に關せず、腹を立て怒  
 り廻ると云ふ甚だ厄介病な奴である、尙又酒を呑むと總てのことが愉快に

なつて、面白くてたまらない様になる者がある、そもく酒たるや吾々の  
 身體を刺戟し、精神作用をして著しく興奮せしむるものである、さうし  
 て酒を多く欲する者は平素物事に感染し難くい人が多くて剛膽なのが普通  
 である、故にかゝる人に交際を求めたり、應接を爲さんとする場合には、  
 須らく公明正大に進まなければ到底其目的は達し得らるゝものでない、又  
 酒飲みにして平素情に支配され易い人がある、かゝる人に對しては、多く  
 多血性の人であるから感情を害しないやうに交際を交へて行けば圓滿に之  
 を持續してゆくことが出来ることは争れない事實である、況んや短時間



の應接で要領を得んとするに於ては、活潑に痛快に應接する様にせなければならぬ。

五三、樂天家

世の中には随分樂天家もあればあるもの、何事に因らず平氣の平左衛門奈何なることも知らぬ顔の半兵衛を極め込み、世の中を茶にして、蛙の面に水、馬の耳に風の吹き流し、明日食ふべき物に差支を生ずるも、一向に無頓着、悠悠寛々として、急がず慌てず、狼狽へず、動かず、騒かざる暢氣者、これでも五體に血が廻つてゐるか、窃かに太股の邊を抓つて見れば、

豈はからん、痛みを感じると見えて膨面をする、感情に鋭敏な人間に斯の如き、迂遠な奴があるかと感心する人もある、そもく樂天家の云ひ草が面白い、目前に難頭が迫つてゐても、命あつての物種だ、何にもくよく、あくせくと心配するに及ばないと悠悠として居る、さうして貧乏しても、病氣しても、失敗しても、死ぬまで、暢氣に樂天的に一生を送る先生である、こんな先生に短時間で要領を得る應接をするのは一寸、骨が折れる、併し彼は樂天家であるだけ何ごとも苦にしない先生だから、屁理窟家のやうに人に反對するが如きことはない、故に或一面から云へば、か



ゝる人に對する應接は容易いかも知れない、即ち彼はどちらかかと云へばお人良しの方であるから人の要求を絶對に拒む人間でない、又彼は素質からして樂天的だから、快活的に至極面白く應接するに於ては、其目的を達し得らるゝことは確かである。

五四、子可愛がり

子を持つ親の心は皆一つ、子を可愛がらぬ者は廣い世界に一人もない、彼の人を食ふ野蠻人でさへ我子の爲めには身を犠牲にする場合がある、誠に親子の愛情と云ふものは慈愛の中でも最も深い泉である、子の爲めなら

如何なることも何のその、子が爲すことなら何のその、朝から子に鼻を魅まれ髪の毛を撈られて眼を覺さゝれ、そんなことが馬鹿に嬉しく、汚れた手で肩へ上られて喜び、障子に穴をあけられ、机の上のインキをコロガされて笑ひ、お茶碗を滅茶々に毀されて腹を立てるかと思ひの外、却つて之が光榮に感じられるのが親たる者の人情である、殊に子を愛するものゝ甚だしきに至つては、子の放蕩を見て喜び、墮落を爲して故郷へ歸り來たるを歓迎するが如きは尠くない、茲に於てか親馬鹿と云はざるを得ない、斯の如く子に對する親の慈愛相等しきものと雖ど、特に子を愛する程度、他



に及ばざるものがあり、かゝる人を考査して見るに固より同一なりと云ふことは出来ないが、大體に於て之を云へば多血性の者最も多きを知る、故に情に深くして物に感染し易く而かも活潑な人であるから、概して交際家である、従つてかゝる人と應接を爲すに於ても、相手の感情さへ害しなれば、其目的を達し得る人である。

五五、新聞記者

社會に生新の氣を注入する新聞記者、社會の耳目たる新聞記者、國家に直言直行し得る新聞記者、閣下は社會の指導者にあらざるや、諸君は社會

の耳目として常に新しき思想を注入する人にあらずや、然るに其半面を考査して見ると、又驚くべしだ、案外世間知らずが尠からざるが如き、國家に直言直行し得らるゝに拘らず、無暗矢鱈に提燈持をするが如き、社會に敵なき新聞記者でありながら○の爲めには三歳の兒童の如く取扱はるゝが如きは尠くない、如何に物質の世の中とは云へ、社會の耳目として社會の指導者たる新聞記者先生が、餘りに物質に偏波し過ぎやしないか、かゝる人に對し應接を爲すときは、須らく物質と云ふことを忘れてはならない何に分先方は人一割上手な外交術を知得して居るのみならず、面の皮は



千枚ばりと来て居るので、中々の外交では凹む男でない、まして感情を害するやうなことでも云ほふものならそれこそツウ／＼しく弱點に向て進んでくるので、イツカな金次郎さんも、之には閉口々々頓首をせざるを得ん故に彼の機先を制して彼を降伏せしめるだけの外交術は餘程腕達者の者でなければ却つて失敗すること疑ひなしだ、それよりは彼の弱點たる物質に向つた方が、確かに好良である。

五六、芝居好き

人の嗜好は千差萬別であつて、人に因り色々其好む所が異つて居る、就

中芝居好きと來たら斷念でものが云へない、朝ツばらから庭の掃除をしながら、芝居の眞似朝飯を食つて亦眞似る、人様が迷惑しても蒼蠅がつても知らぬ顔の半兵衛をきめ込んで、お湯の中で、嘔鳴り廻る、嬢アが御飯を運ぶと『ア、飯か余は待ち兼ねた』など、やりよる子供が歸れば『オウセガレであつたか苦しうない近こう參るれ』とやる、朋友輩でも訪ねて來ようものなら『オウ誰かと思へば何々氏、ようこそお越し遊ばされた、いざ先づ之れへと洒落をやる、何事によらずこんな状態であるから實に滑稽だ、以上は舊芝居の中毒家だが、又新派の中毒家もある『君明治座へ行つ



たが實に面白かつたよ、あの海岸で武夫と浪子の離れの場なんか詞では云へない程、好かつたよ精神恍惚として我乍悲かしたよ、僕は誰がなんと云つても新派程好きなものはないよ、實に人情の機微を穿つて居る處は到底舊芝居などの及ぶ處ぢやないよ』と云つて殆ど自己の本分を忘れ今日も芝居明日も演劇と云ふ有様で、全く精神をとられてる奴がある、かゝる人に對し短時間の應接で要領を得んとすれば、先づ彼の情に支配され易い弱點を捉へて進むやうにしなければならぬのである、何となれば芝居好きの者は情的の好奇心に強い空想家が多いからである。

五七、原稿家

原稿生活をしてゐる人も澤山あるが、殊に主義なく方針なく、姫糊と缺で綴り上げた原稿を天下に恥す、恐れず振り廻して賣り歩く、可愛相な奴もある、さうして他人の説を恰も自分が發見した如く、矛盾した論法を名論の如く、觸聽して居る、原稿がまがよく賣れた場合の彼の得意さは思ひやられる、殆ど天下をとつたやうな氣になつて、明日食ふべきことを忘れ、パツパと消費う處は一面剛膽なやうにも見えるが、さて内面に立入つて見ると可愛相な所がある、滅多に金のお顔を拜したことがない奴だから



尠ごしでも収入ると、膽ツ魂が宿替する程嬉しくて、一寸先が暗になつて明日のことは兎に角目下の勘定のことまで忘れる状態、又彼の云ひ草が面白、金は天下の廻り物だ、慾しくば廻るお金だ、何もくよくよするにや及ばないと暴言を吐いて得意然として居る、そのくせ金のないときが多くて何日もくよくよパン問題で悩まされて居るではないか、かゝる先生に對し應接を爲す場合は、煽動的に限るのだ、ろくでもない文章を書いて居ても本尊さんは天下の文士のやうに愚考して居るのだから、鼻の高いことに實に驚くべしだ、併し餘り煽動し過ぎると増長するかも知れないが、先づ増

長しない範圍内で煽動たならば、如何なる要求をも入れるのが常である。

五八、迷信家

迷信家の中にも色々變つたのがある、甚だしきに至つては、今日は三りんぼうちやに因つて建物を建築しては不可ぬ、友引だから葬式をしては不可ぬ、佛滅だから醫師にかゝつては不可ぬと云ひ、又今月は八方ふさがりだから商賣を中止せなければ不可ぬなど云つて居る、こんなことを云ふ日になると今日は日が悪いから、お生産を日延せよと嬖アに命ずるかも知れない、若しそんなことを云はんとしても今日は日が悪いから、假令大



切な要件があつても面會を中止するかも知れない、そうなると五分間應接者も至極迷惑する、要するに迷信家は、自己に理解力なく、決断力なく、工夫の知力なく、反抗の膽力なく、分別の思慮なく、いろ／＼な分りきつた事々物々を氣にして、つまらない傳説に迷ふのである、加之も一度之の迷の中に這入れば、如何に其理由を説いても、論しても、容易に其迷ひより悦することは出来ない人間である、かゝる迷ひの人に接した場合は五分間應接者も、如何とも致方がない、併しかゝる人は、非常に小心にて正理の人であるから、公明正大に誠意を以て應接するときは其目的を達し得ら

るゝ人である、さうして判断心や、決断力に乏しい人であるから、之の點を補ふ様に心懸けて居なければ五分間の短時間では應接した目的を達することは出来ない。

五九、閑人

生存競争が烈しくてせち辛き世の中に、何をするとなく、ぶらりくらりで世を送る暢氣な閑人がある、彼には一定の職なく、主義なく、理想なく野心なく、只だ暢氣三昧に、浮世を絲瓜とも思はぬ伶俐と素馬鹿との間者寝たり起きたり、立つたり坐つたり、歩いて見たりかけて見たり、笑つて



見たり怒つて見たり、偶々來客でもあらうものなら、其人を捉へて一時間でも半日でも、迷惑しやうが、困難しやうが、平氣の平左衛門、つまらない談話を引かけて、中々歸させない、茲に於てか五分間應接者も甚だ迷惑な次第である、かゝる人に對して短時間の應接で要領を得んとすれば、先づ彼をして多くの口をきかせない様にするのが肝要である、若し彼が得意になつて談話出したとすれば容易に彼をして要領を得させることは出來ない、故に機先を制し、尙機先を制して彼の得意なる談話に移らざる様、深く注意して居なければ五分間の短時間にては、其目的を達することは出來

難い、まして彼が談話好きと來た日には始末に終へない、つまらない談話に興味を惹起て、ベチャ／＼と饒舌り立て、他人の云ふことなどはよそごと聞いて、自分勝手な談話に無中になる、こんな状態では五分間はさて置き一時間たつても二時間経ても何等要領を得ることは不可能である。

六〇、狸親爺

狸親爺と云へば早速九太夫を連想する、なんと九太夫は狸親爺の標本として適當な奴ではないか、主君が御切腹と云ふときまでは、奈何にも忠臣のやうな面つきして、眼につばきでもつけて、愁傷らしく装ふ様は現在式



ではないか、御最後遊ばされるや否や、忠臣義士の謀を裏切つて私腹を肥やさんとする處も現在式ではないか、私腹を肥さんが爲めには、恥も人情もあつたものではない、づう／＼しくも人の生血を啜る奴さ、人が正理に進むを妬み、人が成功すれば喜ばず、人を冷笑罵倒して喜び、己のみ横着を構へて得意然として居る面の皮、ぶつても叩いても音のしない奴である、かゝる横着者と應接した場合に注意して居ることは、彼奴のツウ／＼しい外交術に引かゝらないやうにするのが肝要である、こ奴は俗に猫かぶりとも稱する奴で中々一筋縄や二筋縄では通らない奴、頭から唾をかけ

られても私慾を肥す爲めには、へい／＼で胡魔かしよる、泣いても怒つても馬の耳に風の吹き流しと極め込んで、濡れ手で粟のつかみどりを望んで居る頗る勘定高い狸野郎、こんな圖太い野郎だに因つて相手を怒らして獨り利得でもしようと思ふ驚いた奴だから、無暗に怒らないやうにしないと彼奴の劣等な外交に降服せざるを得ないことゝなる、立腹は御無用と頭に印して置かなければならないさうして彼奴をして要領を得せしめんとすれば彼の弱點たる物慾の満足てふことに向つて突進すべきものである、決して情の爲めに動さるゝ人間でないが貧慾の爲めには動かさるゝ人間であるか



ら此の點から進むやうにしなければならぬ。

六一、虚榮家

近頃は何ごとにも因らず、何人に拘らず、虚榮的行爲に支配されて居る、殊に女子と来た日には甚だしいもんだ、いけもせぬ番臺面に朝夕紅白粉をベタ／＼、九尺二間の長屋住居なるに、何處かの華族のお嬢さんのやうに着飾り、牛のお尻のやうな大きな奴をブイ／＼振つてすました處は天下一品これでも本尊様は我こそ天下の美人なり、惚れざるは男の恥なるぞと云はんばかりの面附、男の多い世の中に案外惚れ手が尠いとは呵しさ過ぎて哀

れである、折角番臺面を誤魔化さうと朝夕鏡ごくび／＼きで辛氣辛苦の骨折もこれでは、餘りあり難味が薄す過ぎると観音様に文句を云ふかと思ひの外、一割も二割も虚榮心に強い先生だから、嫌な奴だと尻目にかけても、先生早や合點して、はて我輩に秋波の矢が立たなと喜ぶ哀れさが思ひやられる、又野郎であると、何日も學校は尻から一番まが悪しくは落の字の奴が、一躍高等官を夢みて暴言、立ちんぼの娘が華族の花嫁を夢み、馬の足を勤める俳優が團十郎を夢み、おさん大明神が天下の美男子と結婚を望むとは呆れ返つた身の程知らずの虚榮家揃ひ、こんな奴に應接した場合は感



情を害しない程度に於て煽動てるにしかずだ、自惚れの強い奴に對した場合には反抗した日にはそれこそ、始末に終へない、何を云ふても聞つこのない代物だ、『身の程を知らない白痴た奴には危険に近寄す』の論法で進まなければならぬのである。

六二、焼き餅やき

人間の通有性として男女共に嫉妬心のあることは免れない事實である、然るに其焼き方が猛烈で、鬼のやうに角を生やし凄まじい勢いの奴がある、嬢アが一寸お使に出ても、人と話談をして居ても、留守中に電氣家が來て

居ても、無暗に嬢アを疑ひ、お焼が始まる、さうして友朋衆などが、君の細君は美人だねえ、中々上品だねえ、愛嬌もんだねえ、など云はうものなら、お焼先生ハテな野郎僕の嬢アに惚れて居やがるな油断がならないと早や合點をして膨面をし始める、之れが嬢アの方であると亭主が勤め先から少しでも歸りが遅いと早速始まる、散歩に出て歸りが遅いと又始まる、お湯の歸りが遅いと焼ける、併し男の焼くのと異つて、初めは膨面をしながら詞をかけても返事をしない、こんなときに亭主が甘い詞でも云はうものなら、ブン／＼怒り始め胸倉をも取りまじき勢となりよる、何れにする



も人並以上の焼き餅は、一つは我が儘から生ずるのであるが、性格にも餘程支配される、即ちやきもちやきの甚だしい奴は膽量のない、輕卒な神經過敏の奴に最も多いのである、かゝる人に接した場合は亭主に對し嬢アのお世事詞は一切禁物である、若しこんなお世辭を云はうものなら決して應接で要領を得ることは不可能である、故に他に彼の弱點を捉へるやうにしなければならぬ、然るに彼は小心で情に支配され易人間であるから、之に向つて進む様にすれば確かに其目的は達しられる人である。

六三、小僧亭主

近頃では現在式かは知らないが、嬢アが天晴名家の令夫人と思はるゝ如くに着飾つて、悠々と歩く後から御亭主は殆ど家來かの如く御供しながら怡々として喜んで歩いてる奴がある、こんな状態では家庭にあつては殆ど言語道斷であらう、嬢アが朝寢して居て亭主が勝手下のおさん大明神の役から表の庭掃除から、子供の洗濯から、子供の守りから、嬢アの按摩とりに至るまで、兼任をすることであらうと思はれるが、夫に外出と来た日には、お供だけなればまだしも、嬢アの御持參物から嬢アの買物まで亭主が御苦勞にも擔ぎ廻つて嬢アは手振らで紅白粉でもして指輪を光らせ時計



をぶらさげながら、大きな番臺面を一層大きくしてノサバリ歩く状は實に主従の關係がある。こんなことまでして番臺面の嬢ア奴の御機嫌とりをしなくばならない御亭主の實力たるや、定めし立派なものであらう、亭主たるものが、かゝる淺ましい振舞をしなければ、嬢アに愛を受けることが出來ないとすれば亭主の價値たるや、三文の價値なき野郎である、斯の如き三文の價値を有しない人に接した場合は、如何に之を馭し得るやと云ふに嬢アに對してこそ三文の價値がなくても、他人に對しては一人前の理窟を列べる先生もある、併し嬢アに三文の價値しかない人だけあつて世人に對し

ても、又弱點を認められる、その弱點たるや、先づ嬢ア大明神を崇拜することが肝要である、彼は嬢アを以て恰も神の如くに怖れ敬慕してゐるのであるから、崇拜され賞られるに於ては快感其極に到し、遂に如何なる要求をも受けることとなるのである。

六四、無情な奴

凡そ戀愛と云ふものは異性間に生ずるものであつて、雙方ともに必ず一人づつでなければならぬ、相手同士の一騎討、いくら組んでも投げても轉がつても、始めから終まで同じ相手でなければならぬ、若し相手が複



數であれば、相手選ばずの獸慾に陥つて、最早戀愛を談ずる資格がない奴であるかゝる獸慾者の常に爲す處を見るに、先づ五人に當りをつけて同じ文意の艶書を各人に投じても目的を達せざるときは、之等を口説廻ると云ふ始末、もし其中幸にも一人が物になれば名譽の如くに心得てる奴、さうして其一人を何日まで愛するかと云へば、只だ當分の獸慾凌ぎと云ふ輕薄無情の奴、すぐ飽きて、又新たにお變りを探て歩くこと云ふ野郎、加之もそれを恥ともせず、淺ましいとも思はず、却つて自己が手腕家なるが如くに心得へ誇とするが如きは只だ驚くのみである、かゝる現象は戀愛のみ

でない、外の總てのことについても、輕薄無情な奴は矢張、輕薄である、自己本意である、我が儘である、かゝる奴に接した場合は吾々は、奈何に之を馭し得るやと云ふに、彼は忍耐に乏しく、加之も情に支配され易きこと、恰も兒童の如き奴である、然るに彼は比較的、活發にして判断力に富むが故、彼の感情を奮起せしむるに於ては短時間に於ても容易に其目的を達し得る人間である、彼の感情を奮起せしむるは、彼の主義本領に反しない程度に於て煽動する如にするのである。

六五、ヒステリー女



そもくヒステリーたるや、女子特有の神経病であつて始末に終へない病氣である、嫉妬が強くて、執念深くて、判断力に乏しくて、おまけに迷信深いので容易に人の説を入れる奴でない、こんな奴を嬖アにした人は其統御術に殆ど迷惑するであらう、ちよつとしたことを氣にかけて、怒つたり泣なり焼たり、頗る險惡である、偶々喜ぶかと思へば、早速ブンくして八つ當りに當り廻る、そのくせ神経が過敏であるから色々と氣を廻し亭主の弱點などを拾ひ求めてくつて、かゝる實に始末に終へない奴である、かゝる女に接し知時間で要領を得んとするのは、中々骨の折れる仕事であ

る、斯の如き病的の者に對しては、彼の嗜好に向つて快感を惹起さしめ、而して後要件を持出す如にしなければ到底彼を馭し得らるゝものでない、彼は迷信に深く而かも執念深き奴なれば、自己が信じたることは理が非でも、徹底的に之を貫かねば已まんと云ふ、頗る強情な我が儘な人間であるから、正面より突進しても、いつかな之に屈服する女でない、故に他動的に彼を馭するの途を知らなければならぬ、其他動的に彼を馭する方法は應接に際し彼を快感ならしむることである、さうして快感ならしむるには彼の最も好む處に向ひ、機先を制した後其要求に進むのが肝要である。



六六、東京者

今日の東京も昔時の江戸ッ奴氣質が幾分か遺物として存して居る、瘦せ我慢な、負けおしみの強い、淡泊な所は確かにある、故に關西の者は東京者を批評し、東京者は關西の者を罵倒する、兎角東京者と關西者とは其態度に於て、其氣質に於て、黑白の相異があるかの如に思れる關西者に東京者を批評させると、曰く東京者は伶俐な如で間拔だから、怒らせると金を消費ふ、さうして直ぐ怒るから、自由に彼を馭すことが出来る、至極面倒のない奴であると云ひよる、氣が早くて淡泊な負けぎらいな點から之を云

ふときは或は然らん、何れにするも決斷心があつて純白であることは争はれない所がある、故に東京者に對した場合は、活發な態度で而かも明瞭な言語を用ひて感情を奮起せしむる如に力めることが肝要である、果して感情を奮起せしめた場合は判斷もしないことでも、早や呑み込をして承諾する者さへあるのだから關西の者が批評するが如きもまんざら間違でもない従つてこの點に注意して居れば、五分間の短時間に於ても容易に馭し得ることが出来る人間である、要するに東京者は習慣が情に支配され易く仕立て居るから、其情に支配され易い弱點に向つて進むときは必ず其目的を達